長野市の埋蔵文化財　第31集

町川田遺跡

1988・3

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

序

繁栄を誇る現代文明は一朝一夕にして築き上げられたものではなく、悠久な時の流れの中での人類の試行錯誤の結果もたらされたものであります。また人類の試行錯誤の証拠としての埋蔵文化財は再生産のきかない文化財であり、人類共有の文化遺産であります。多様化する現代社会の要求に対し、開発は我々にとって必要不可欠な新たな試行錯誤でありましょう。しかし我々は同時にそれによって失われてゆく埋蔵文化財とう過去の記録を保存する責任を負っていることも事実であります。今回調査しました町川田遺跡も道路改良事業という現代の要求にせまられての調査でありましたが、ここに本報告書を刊行いたしました。わずかではありますが我々に課された責任の一端を果たし得たものと考えます。今後この報告書が長野市における古代史ならびに地域史研究に大いに活用されますことを願ってやみません。未筆ながらこの調査のために御指導、御協力願った関係者のみなさまをはじめ、直接・関係に調査に参加されたみなさまに記して感謝いたします。

昭和63年３月

長野市教育委員会　教育長

奥村　秀雄

例　　言

1　本書は町川田地区道路改良事業予定地内における緊急発掘調査報告書である。本遺跡は長野市若穂川田町川田字古町上2682－4番地先ほかの地籍に存在するが今回の事業にともなって発見された新発見の遺跡である。今回の調査によって町川田地区の自然堤防上には、集落址の存在が確認され、将来的には大規模な遺跡群として把握される可能性が高い。そのため今回その遺跡名を、「町川田遺跡」として報告する。

2　調査及び報告書作成等の業務は長野市遺跡調査会が行った。

3　本書作成における作業分担は下記のとおりである。

遺構図整理・浄書	千野
遺物整理	中殿　古岩井
遺物実測・拓本	中殿　清水　矢口　千野
遺物浄書	千野
写真	矢口
編集・執筆	千野

4　遺構図は1：60を基本としているが、微細を要するものに関しては1：30とした。遺構図中のドットは床面もしくは床面直上の遺物出土位置を示し、それに伴う数字は遺物番号を示している。またスクリーン部分は炉である。遺物実測図は1：4に、遺物拓影は1：3に基本的に統一した。赤彩された部分はスクリーンで示してある。

5　調査日誌及び遺構実測図中遺構名を略記してある。住居址（ＳＢ）・土壙（ＳＫ）・溝址（ＳＤ）等である。

6　調査の諸記録及び出土遺物は当面長野市埋蔵文化財センターで保管するが、将来的には長野市立博物館にて保管される。

目　　次

序
例言
Ⅰ　調査に至る経過と方法……1
　1　調査に至る経過……1
　2　調査会及び調査団……1
　3　発掘調査の方法……2
　4　調査日誌……3
Ⅱ　遺跡周辺の環境……4
Ⅲ　調査……9
Ⅳ　総括……49

挿　図　目　次

図1　調査区位置図……3
図2　遺跡周辺の地形と調査地……5
図3　遺跡周辺の主要遺跡分布図……6
図4　調査区全測図……(折り込み)
図5　1号住居址実測図……9
図6　1号住居址出土土器拓影……9
図7　2号住居址実測図……10
図8　3号住居址実測図……11
図9　3号住居址出土土器実測図……12
図10　3号住居址出土土器拓影……12
図11　4号住居址実測図……14
図12　4号住居址出土土器実測図……14
図13　4号住居址出土土器拓影……15
図14　4号住居址上層出土土器実測図……16
図15　5号住居址実測図……17
図16　5号住居址出土土器実測図……17
図17　5号住居址出土土器拓影……18

図18　6号住居址実測図……18
図19　6号住居址出土土器実測図……19
図20　6号住居址出土土器拓影……19
図21　7号住居址実測図……20
図22　7号住居址出土土器実測図……20
図23　8号住居址実測図……21
図24　8号住居址出土土器実測図……21
図25　8号住居址出土土器拓影……21
図26　9号住居址実測図……22
図27　9号住居址出土土器実測図・同拓影……22
図28　1号土壙実測図……23
図29　2号土壙（甕棺墓）実測図……23
図30　2号土壙（甕棺墓）出土土器実測図……24
図31　3号土壙実測図……25
図32　4号土壙実測図……25
図33　4号土壙出土土器実測図 ……25
図34　5号土壙出土土器実測図……26
図35　6号土壙実測図……27
図36　6号土壙出土土器実測図……27
図37　7号土壙実測図……27
図38　8号土壙実測図……28
図39　9号土壙実測図……28
図40　10号土壙実測図……28
図41　11号土壙実測図……28
図42　12号土壙実測図……29
図43　12号土壙出土土器実測図……30
図44　12号土壙出土土器拓影……30
図45　13号土壙実測図……30
図46　13号土壙出土土器実測図……31
図47　13号土壙出土土器拓影……31
図48　14号土壙実測図……31
図49　14号土壙出土土器実測図・同拓影……31
図50　15号土壙実測図……32

図51　1号溝址実測図……32
図52　2号溝址実測図……33
図53　3号溝址出土土器実測図……33
図54　3号溝址実測図……33
図55　4号溝址実測図……34
図56　5号溝址実測図……34
図57　5号溝址出土土器実測図……34
図58　遺構外出土土器実測図①……37
図59　遺構外出土土器実測図②……38
図60　遺構外出土土器実測図③……39
図61　遺構外出土土器実測図④……40
図62　遺構外出土土器実測図⑤……40
図63　遺構外出土土器拓影①……41
図64　遺構外出土土器拓影②……42
図65　遺構外出土土器拓影③……43
図66　遺構外出土土器拓影④……44
図67　遺構外出土土器拓影⑤……45
図68　遺構外出土土器拓影⑥……46
図69　石器類実測図……47

図　版　目　次

図版1　1号住居址・同遺物出土状況・2号住居址
図版2　3号住居址・同遺物出土状況・5号住居址
図版3　5号住居址遺物出土状況・6号住居址・7号住居址
図版4　8号住居址・9号住居址・1号土壙
図版5　2号土壙（甕棺墓）
図版6　3号土壙・4号土壙・6号土壙
図版7　12号土壙・13号土壙・14号土壙
図版8　1号溝址・3号溝址・同遺物出土状況
図版9　5号溝址・調査風景
図版10　土器
図版11　〃
図版12　石器

I　調査に至る経過と方法

1　調査に至る経過

昭和62年、長野市は町川田地区道路（若穂西75・77・78号線）改良事業を計画した。事業予定地は千曲川の自然堤防上に位置し、遺跡が存在する可能性が十分に考えられたために、長野市遺跡調査会は同予定地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、試掘調査を実施することとした。

試掘調査は昭和62年８月27日に実施し、事業予定地内の任意の地点に試掘坑を３ケ所設定した。その結果遺物包含層ならびに遺構覆土が確認され、集落遺跡の存在する可能性が認められた。

この試掘調査の結果をもとに、長野市遺跡調査会では施工に先立って発掘調査による記録保存の必要性を認め、昭和62年12月14日より調査に着手する運びとなった。

2　調査会及び調査団

長野市遺跡調査会は、市内所在の埋蔵文化財等遺跡発掘調査の調整企画、及びそれに基づく発掘調査・分布調査を実施し、その記録作成と発掘された埋蔵文化財の保存活用について研究することを目的として設立されているもので、長野市教育委員会より委託を受け、各遺跡調査団を編成して調査を実施するものである。

長野市遺跡調査会の組織

会　長	奥村秀雄	（教育長）
委　員	米山一政	（長野市文化財保護審議会長）
〃	小林　孚	（　〃　委員）
〃	丸山義仁	（教育次長）
〃	矢口忠良	（調査団長）
〃	青木和明	（調査主任）
監　事	戸津幸雄	（教育次長副任兼総務課長）
事務局長	小木曽敏	（長野市埋蔵文化財センター所長）
事務局員	小山　正	（　〃　所長補佐）

矢口忠良　（　〃　調査係長）　青木和明　（　〃　調査係主事）
千野　浩　（　〃　調査係主事）

調査団の編成

総括責任者	小木曽敏	（長野市埋蔵文化財センター所長）
庶務・経理	小山　正	（　〃　所長補佐）
〃	倉田佳世子	（　〃　職員）
調査団長	矢口忠良	（　〃　調査係長）
調査主任	青木和明	（　〃　調査係主事）
〃	千野　浩	（　〃　〃　）
調査員	中殿章子	（　〃　職員）
〃	横山かよ子	（　〃　〃　）
調査補助員	古岩井久仁	（信州大学卒業生）
〃	清水隆寿	（立正大学学生）
調査作業員	大井兵治　大井マツ子　上林けさ子　剱持つる子　佐藤玉江　篠沢きよ　樽井頼子　中沢文子　中牧巳喜子　西沢昂良　橋爪孝次　堀えい子　峯村文則　峯村けさみ　宮下孝一　雪入智恵子	
整理作業員	岡沢治子　徳成奈於子	

3　発掘調査の方法

試掘調査はバックホーを用いて事業予定地内の任意の地点に3ケ所トレンチを掘削し、遺物包含層・遺構面を調査した結果事業予定地のうち300㎡以上の部分について、発掘調査による記録保存の必要性を確認するに至った。調査範囲の表土除去は試掘調査の結果に基づきバックホーを援用した。包含層及び遺構検出作業の際に出土した遺物については「検出面出土遺物」として採取し、遺構検出の後覆土内出土の遺物は覆土上位・中位・床面直上等出土位置ごとに一括して採取した。遺構内遺物のうち主要なものに関しては、写真撮影の後測量により位置・レベル等を記録した。写真撮影は各遺構ごとに遺構検出状況、掘り上がり状況、遺構内細部について実施した。検出された遺構の測量は標高・南北軸ＢＭを基準に2ｍメッシュを組み、簡易的な遣り方測量によって実施し、基本的に1：20、また詳細を必要とするものに関しては1：10の縮尺で行った。

4　調査日誌

62年12月14日　表土除去作業開始

12月15日　本日より調査作業員参加。表土除去作業と遺構検出作業を並行して行う。

12月16日　表土除去作業・遺構検出作業継続。

12月17日　〃　・　〃　継続。

12月18日　ＳＫＩ、ＳＤ１～３調査開始。

12月19日　Ｉ区中央付近遺構検出作業。

12月21日　ＳＤ１～３調査継続。ＳＢ１、ＳＫ２～９調査開始。

12月22日　ＳＢ１、ＳＤ１～３、ＳＫ２～11・13調査終了。ＳＢ２調査開始。Ｉ区北半において遺構存在の有無を確認するためサブトレンチ設定。ＳＢ３を検出する。

12月23日　ＳＢ１・２、ＳＫ２～13写真撮影。II区遺構検出作業。

12月24日　ＳＢ３・４調査開始。Ｉ区南半測量作業。

12月25日　ＳＢ４調査終了。II区ＳＢ４以北の地点遺構検出作業。ＳＢ５～７検出。ＳＢ５～７調査開始。

12月26日　ＳＢ３・５～７調査終了、写真撮影。

12月27日　Ｉ・II区測量作業。調査一時中断。

63年１月５日　調査再開。III区表土除去・遺構検出作業。ＳＤ４・５調査開始。

１月６日　ＳＢ８・９調査開始。ＳＤ４・５、ＳＢ８調査終了。

１月７日　ＳＢ９調査終了。III区各遺構写真撮影、測量作業。機材撤収。現場におけるすべての作業を終了する。

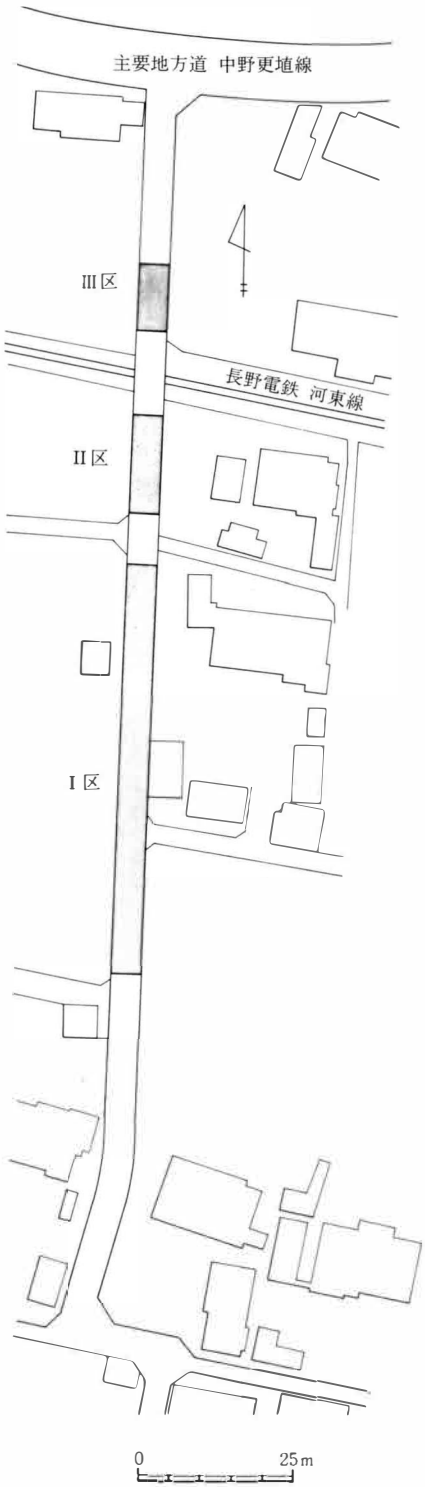


図１　調査区位置図

II　遺跡周辺の環境

長野市若穂は善光寺平のほぼ中央部、千曲川と犀川の合流地点の東岸に位置し、地勢は南から東にかけて、奇妙山・堀切山・保基谷岳・熊窪山・妙徳山・太郎山というような標高1,000m前後の河東山塊の山々に囲まれ、この山間地に端を発し北西に緩傾斜する保科扇状地を地形の中間部となし、西から北にかけては北流する千曲川とこれに合流する犀川によって形成された沖積地が広がっている。特に千曲川河岸の町川田から牛池にかけては幅1kmに及び自然堤防が発達し、本遺跡もこの自然堤防上に立地している。

若穂地域で確認されている最古の遺跡は、保科扇状地最上部の高岡地籍に存する小山平遺跡で、チャート製の有舌尖頭器が出土しており、当該期における菅平地域との関連が考えられよう。縄文時代になると高岡・蓮花に前期の遺跡が存在し、また保科扇状地西端に位置する上和田の宮崎遺跡は、縄文時代後・晩期を中心とする大規模遺跡であることは周知のとおりである。弥生時代以後の集落立地の中心は前述の自然堤防上に求められるのであるが、本格的な調査は今回が初めてであり、未だその内容については不明なところが多い。ただ保科扇状地扇端部には中・後期の塚本遺跡・王子塚遺跡・十二山遺跡等の小規模な遺跡が確認されている。

古墳時代における集落遺跡は、この地域では未だ明確には把握されていないが、祭祀遺跡としては挙手人面土器を出土した片山遺跡が著名である。また集落遺跡は不明ながらも若穂地域には多くの古墳が存在する。大星山山頂稜線上には大室古墳群北山支群があり、その中の大室18号墳は全長49.5mの前方後円墳である。またこの山系の山麓には大星山古墳群（6基）があり、長野市指定文化財の素環頭大刀を出土した5基からなる十二山古墳群と、神林山古墳群（3基）がある。扇状地扇端付近の塚本集落東南端には径22.5mの規模をもつ王子塚古墳（円墳）がある。この古墳は扇状地内にある盟主的単独墳で埴輪様土製品も確認されている。この古墳より上部の保科川・赤野田川に挟まれた地域には11基からなる白塚古墳群、4基の高下古墳群、そして昭和42年若穂団地造成に先立って緊急調査が実施された21基からなる長原古墳群が存在する。特に長原古墳群は積石塚を伴う群集墳であり、中でも大正14年（1925）に消滅したニカゴ塚古墳は合掌形石室を有しており注目すべきものである。

さて以上のような弥生時代以降の遺跡群の生産基盤としては川田条里的遺構が注目される。昭和57年に実施された調査においては、花粉分析の結果地下に埋没した水田面が複数存在する可能性が指摘されている。埋没水田の開発時期等今後の調査研究に期待するところが大きい。

参考文献　『若穂の文化財』　『長野市の埋蔵文化財第13集』

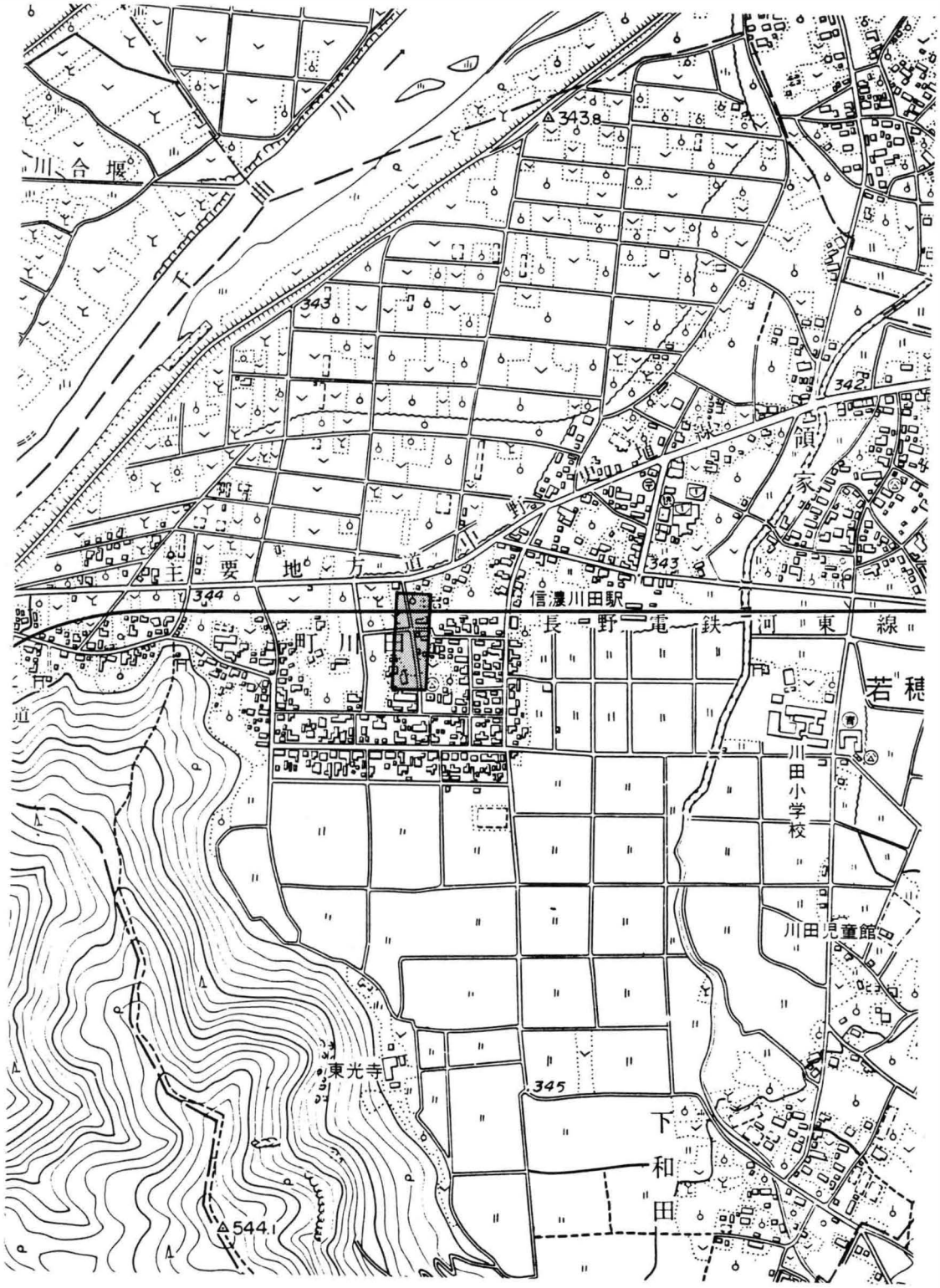


図２　遺跡周辺の地形と調査他

（1：20000）

1．宮崎遺跡　2．十二山遺跡　3．塚本遺跡　4．片山遺跡　5．大室古墳群北山支群(18号墳)　6．大星山古墳群　7．十二山古墳群　8．王子塚古墳　9．白塚古墳群　10．長原古墳群　11．和田・東山古墳群　12．神林山古墳群　13．川田条里水田遺跡　14．閑崎遺跡　15．高下古墳群　16．町川田遺跡

図3　遺跡周辺の主要遺跡分布図

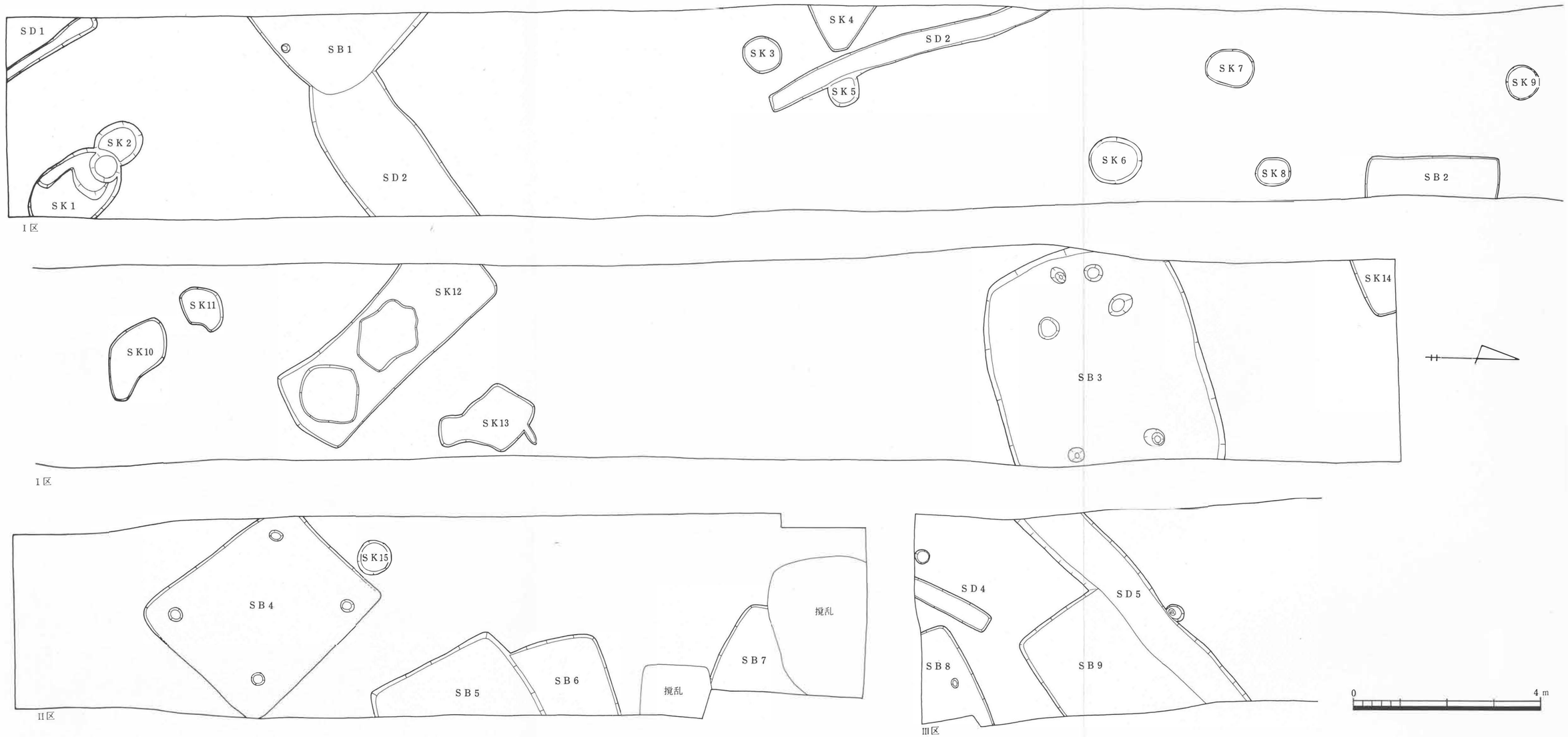

SD1
SB1
SK4
SK3
SD2
SK5
SK7
SK9
SK2
SD2
SK6
SK8
SB2
SK1
I区
SK11
SK12
SK10
SK13
SK14
SB3
I区
SK15
SB4
SB5
SB6
攪乱
SB7
攪乱
II区
SD4
SD5
SB8
SB9
III区
0
4 m

図4　調査区全側図

III 調　査

1号住居址

遺構　（図5）

I区南端付近から検出された住居址で北西部の大半は調査区域外となり、東隅は2号溝址によって切られている。平面プランは隅丸（長）方形を呈すると思われ、確認された範囲での規模は長軸2.95m・短軸2.70mである。主軸はN－44°－Wを測る。検出面からの掘り込みは浅く東壁16cm・南壁25cmである。床面は壁際に至るまでていねいな貼り床がなされ非常に堅緻で、東隅の2号溝址による撹乱部分においても明瞭にそのプランが確認できるほどであった。周溝等は存在しないが南壁際中央付近に柱穴P_1が検出された。径約18cm・深さ21cmを測る。この他に柱穴は検出されておらず柱穴配置等の詳細は不明である。東壁際の床面に接した状態で扁平片刃石斧2点が出土している。また同石斧出土地点の北方では30×20cmほどの大

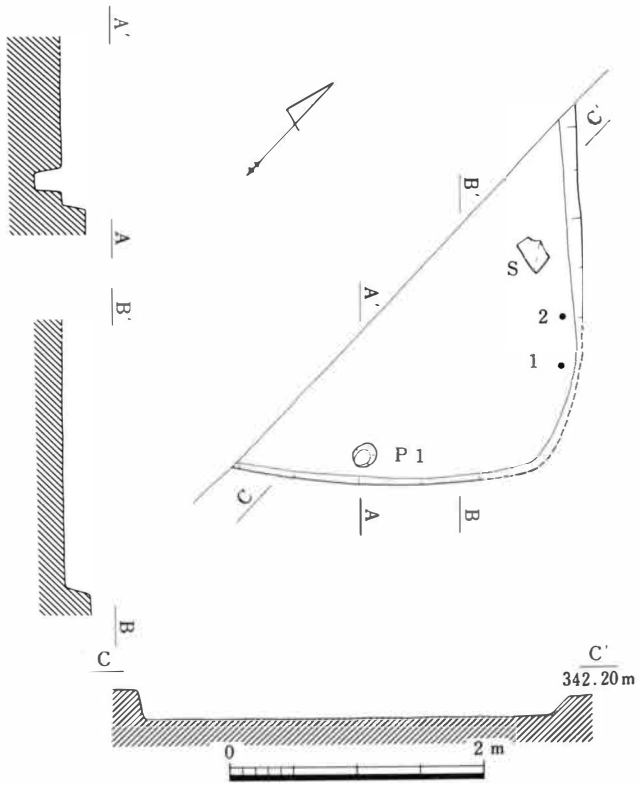


図5　1号住居址実測図

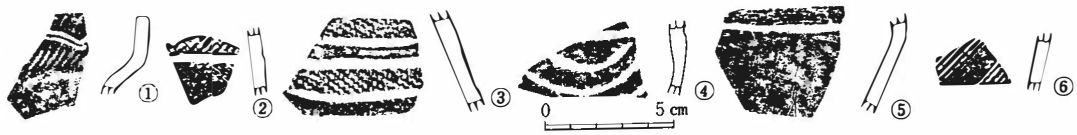


図6　1号住居址出土土器拓影

きさの扁平な自然石がやはり床面に接した状態で出土した。作業台的な機能が推定される。

遺物　（図６・69）

床面より扁平片刃石斧２点（図69）ならびに覆土中より栗林式土器の破片が出土している。

①～⑤は壺である。①は受け口状に立ち上がる有段口縁をなし、口縁部外面にはＬＲの縄文地文上に２本一組の箆による重山形文が描かれる。②③はともに頸部付近で太箆描沈線による区画内に縄文が充填される。④⑤は胴中位から下半にかけての破片で、④には箆描の円弧文が、⑤には直線文が認められる。⑥は甕の胴下半で櫛描の単斜状痕が認められる。

以上の出土遺物より判断すれば、本住居址は弥生時代中期後半・栗林式期に位置づけられる。

２号住居址

遺構　（図７）

Ｉ区中央付近で検出された。一辺約2.90mほどの隅丸(長)方形を呈するものと思われるが、東側は大半が調査区域外となり詳細は不明である。主軸はほぼ南北方向もしくは東西方向にとる。検出面からの掘り込みは北壁30cm・西壁24cm・南壁25cmほどを測る。床面は軟弱で不明瞭であったが、黄茶褐色の砂質土が中央部付近に薄く均一に認められ、この面をもって床と判断した。周溝・柱穴等の諸施設は認められなかった。覆土はしまりのない黒褐色土であり、遺物もすべて覆土中からの出土である。

遺物

栗林式期から箱清水式期にかけての土器小破片が出土しているのみで、実測可能なものは出土していない。

本住居址の時期比定の根拠となる積極的な資料はないが、一応弥生時代後期の所産と把握しておきたい。

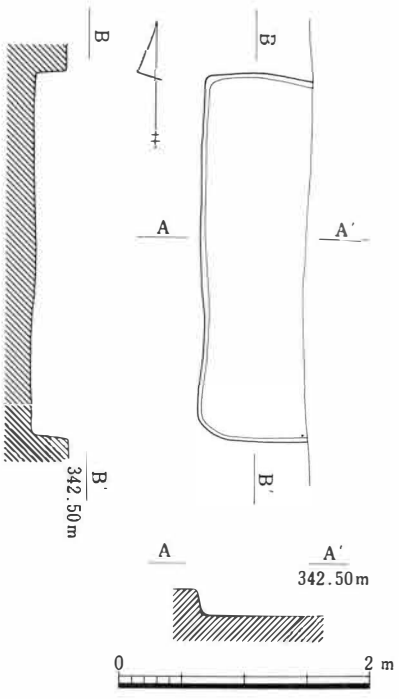


図７　２号住居址実測図

３号住居址

遺構　（図８）

Ｉ区北側で検出され東壁と西壁の一部は調査区域外となる。また西壁と北壁の一部（実測図中破線で示した部分）は、本住居址検出の際に設定したサブトレンチによって破壊してしまった。平面プランは長軸約5.50m・短軸4.55mの規模の隅丸長方形を呈し、主軸はＮ－74°－Ｅにとる。

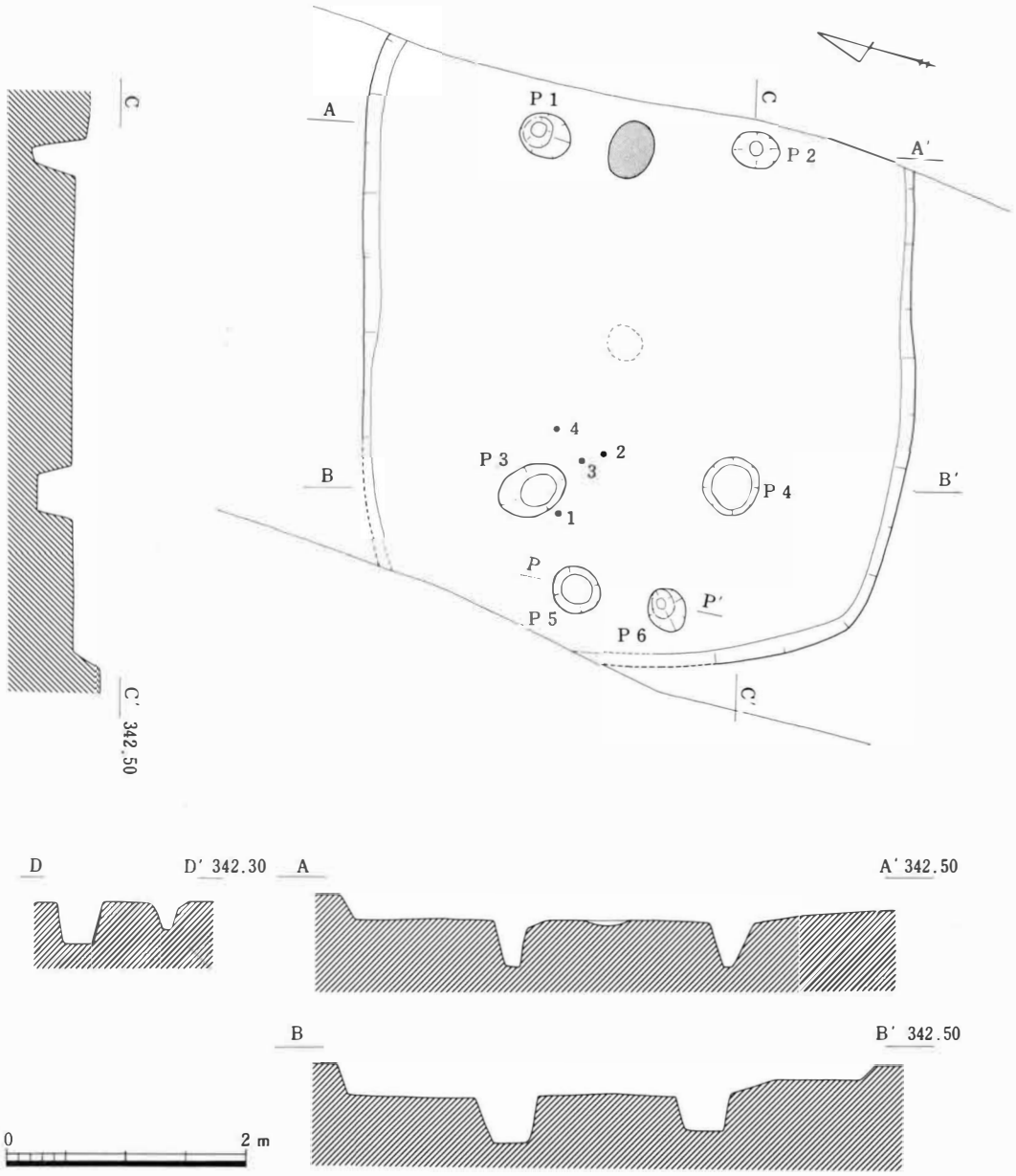


図8　3号住居址実測図

検出面からの掘り込みは北壁21cm・西壁25cm・南壁21cmを測る。床面は壁際に至るまでていねいな貼り床がなされ全体に非常に堅緻であった。主柱穴はP_1～P_4の4本長方形配列で、P_5・P_6は出入口施設に関係する2本一対の支柱と考えられる。深さは$P_1$39cm・$P_2$33cm・$P_3$37cm・$P_4$30cm・$P_5$34cm・$P_6$23cmを測る。炉はP_1・P_2間中央に位置している。炉内は灰が3cmほどレンズ状に堆積しており、周辺と炉の内部には炭化物が顕著に認められ炉の底部はかなり固く焼きしまってい

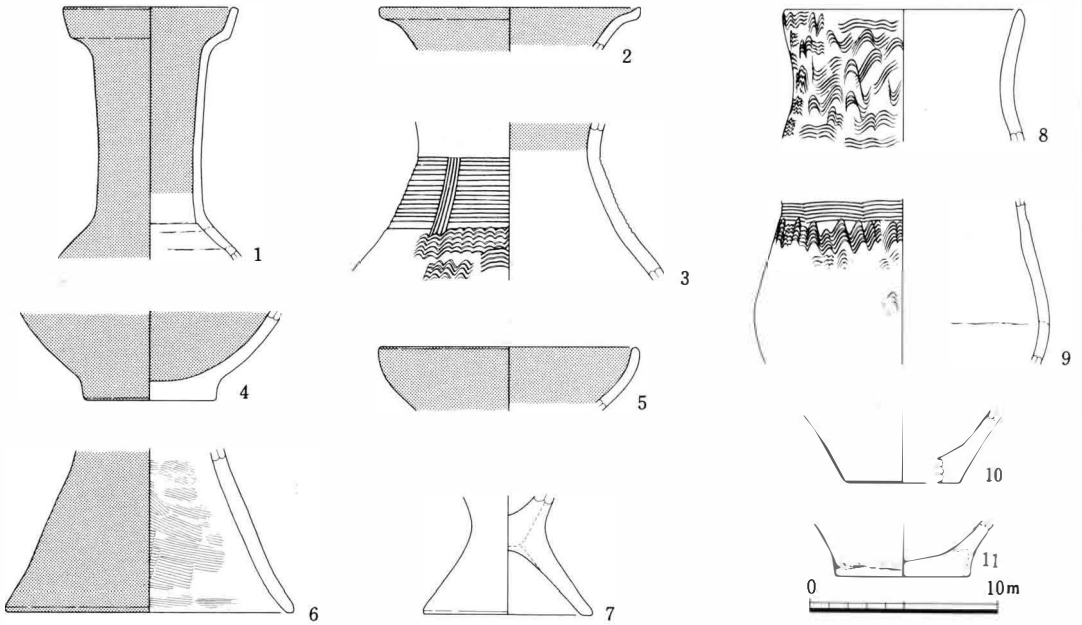


図９　３号住居址出土土器実測図

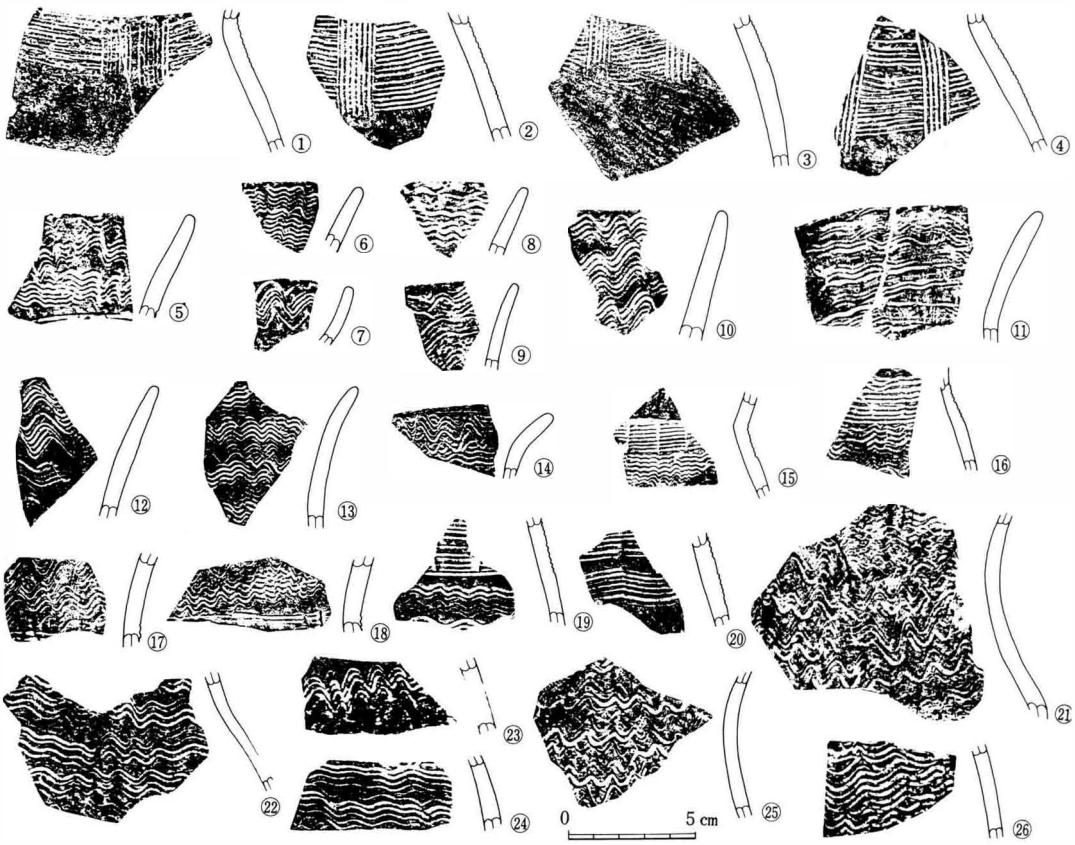


図10　３号住居址出土土器拓影

た。また住居址中央部の実測図中破線で示した部分にも焼土塊が認められたが、炉としての機態を果たしていたのか否かは不明である。P_3の周辺から壺・甕・高坏形土器等が床面に接した状態で出土している。

遺物　（図9・10）

壺　（1～4・11）　1は長頸壺で口縁部の一部と胴部を欠損するが口径9.2cm・残存高13.3cmである。口縁部は有段口縁をなし外面屈曲部には明確な稜を形成する。胴部はさほど張りのない球形胴が予想される。内面には粘土帯接合痕を顕著に残し、頸部との接合部は鋭い稜をなす。口縁部内外面は横、頸部外面は縦の篦磨き後赤彩され、頸部内面はナデ整形後赤彩される。2は朝顔状に外反した後端部にて短く立ち上がる形態をとり、内外面とも篦磨き・赤彩される。口径13.8cm。3はハケ整形後ナデられその後施文されるが頸部にはハケ整形痕を顕著にとどめる。頸部内面は篦磨き・赤彩され、肩部付近はナデ整形されるのみである。文様はT字文と波状文により構成される。T字文は5帯の直線文を上から下へ施文した後縦方向へ直線文を施したものであり、波状文はT字文施文後上から下へ2帯施す。4は底部で、胴部は底部より内湾しつつ立ち上がり球形胴を呈することが予想される。胴部内外面はともに篦磨き・赤彩され、底部も比較的ていねいにナデ整形される。

甕　（8～10）　8の口縁部は頸部からわずかに外反しつつも直に近く立ち上がり、端部は強く横ナデされて尖り気味に終わる。外面はナデ整形後施文され内面はていねいな横篦磨きがなされる。文様は非常に乱雑な櫛描波状文で基本的には上から下へ施文されるが、明確な規則性は認められない。また頸部簾状文は施文されない。9は器面の剝落激しく詳細は不明だが、文様は頸部に直線文を施文した後胴部に波状文を施文している。

高坏　（5～7）　6は脚部破片で、ハの字状に大きく外開し端部にて若干外反する形態をとる。外面は縦篦磨き後赤彩され、内面は横もしくは斜ハケ整形後部分的にナデられる。7も脚部で短くハの字状に開き端部接地面は面とりされる。外面は縦篦磨き、内面はナデ整形される。

以上出土土器の様相よりすれば本住居址は弥生時代後期・箱清水式期に位置づけられる。

4号住居址

遺構　（図11）

2区南側に位置するが、壁の立ち上がり等は非常に不明瞭で柱穴・床面等を目やすとして検出した住居址で、プラン等は推定によるところが大きい。平面プランはやや不整な隅丸長方形を呈し、確認された範囲での規模は長軸約4.0m・短軸約3.30mである。主軸はN－46°－Wを測る。柱穴はP_1～P_4が検出され4本長方形配列である。柱穴はいずれも浅く、$P_1$15cm・$P_2$12cm・$P_3$12cm・$P_4$14cmを測る。床は住居址中央部（実測図中鎖線で示した範囲）のみ堅緻な貼り床がなされ

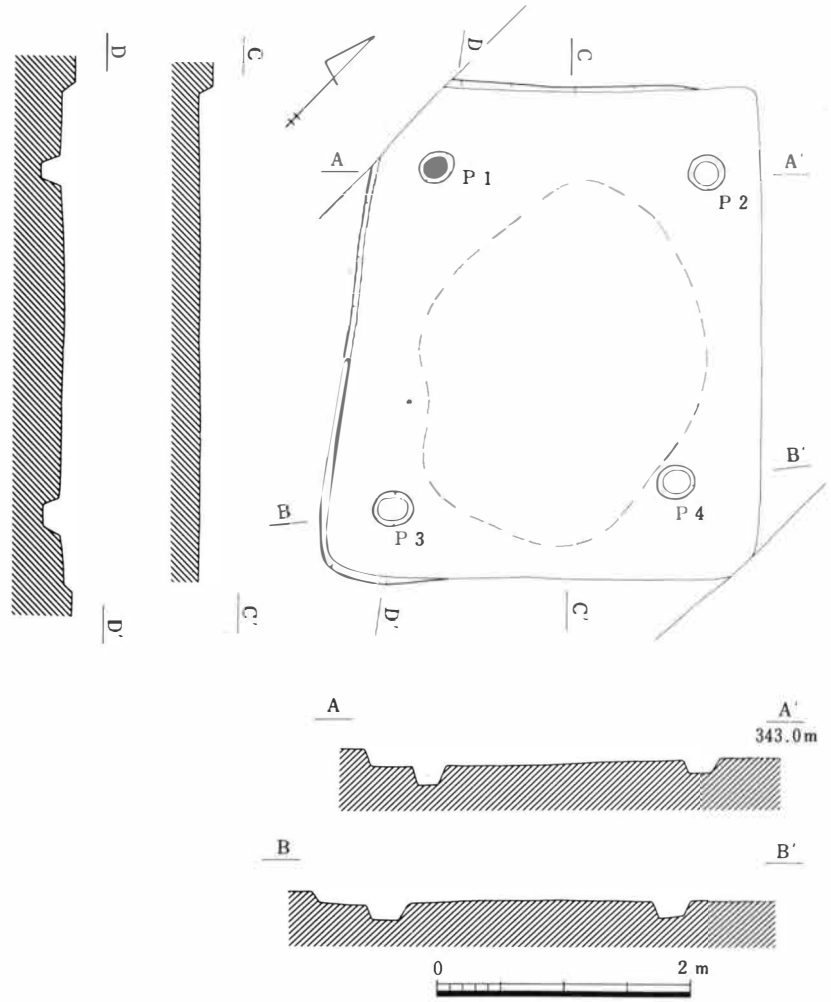


図11　4号住居址実測図

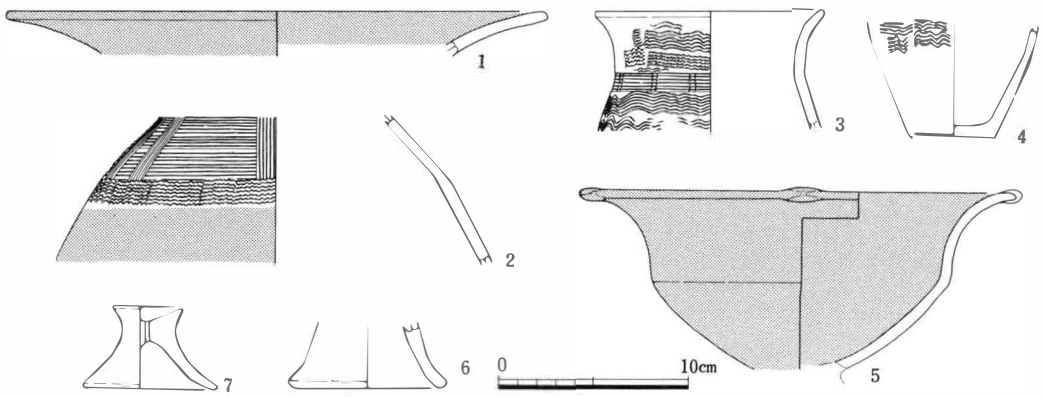


図12　4号住居址出土土器実測図

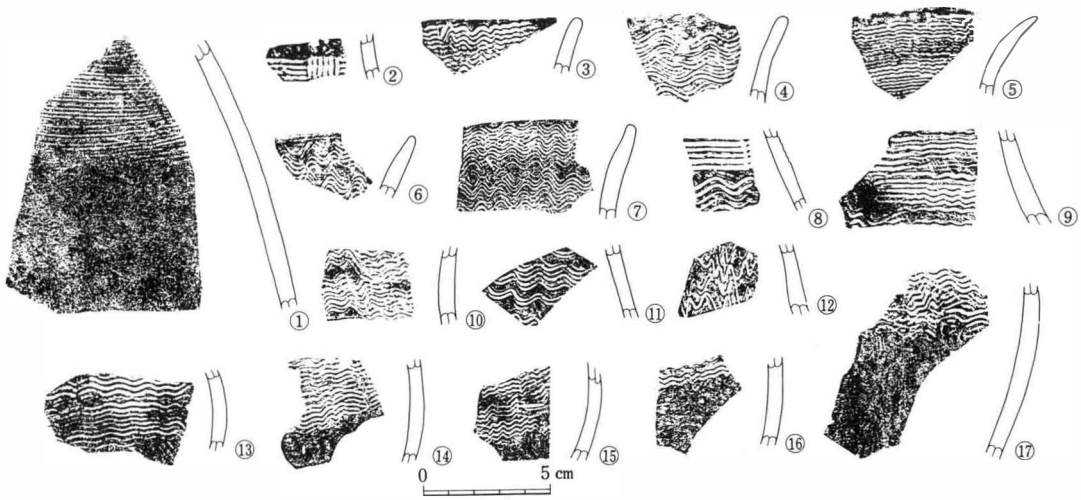


図13　4号住居址出土土器拓影

ており、壁際は非常に不明瞭なものとなる。またP_3・P_4間中央付近に焼土塊が若干認められたが、炉と認定できるものではなかった。本住居址南壁上層部分より図14に示した平安期の土器が一括して検出された。土壙等の遺構が存在した可能性が強いが、前述のとおり遺構検出には非常な困難をきわめ、詳細は明らかになし得なかった。

遺物　(図12・13)

壺　(1・2)　1は口縁部で朝顔状に大きく外反して端部は丸く終わる。内外面とも篦磨き・赤彩される。口径28.6cm。2は胴上部でかなり球胴化が著しく、外面は文様帯を除き篦磨き・赤彩される。内面は剝落激しく詳細不明だが斜方向のハケ整形痕が認められる。文様はT字文と波状文で構成される。T字文は確認できる範囲では4帯の直線文を上から下に施文したのち2本一対の縦方向の直線文を施したもので、T字文施文後その下端に振幅の細かい波状文を一帯施している。

甕　(3・4)　3の口縁部は頸部より直に近く上がり端部付近にて内湾ぎみに外開する形態をとり、最大径は胴上位に有する。内面は横篦磨きされるが部分的に赤色顔料が付着している。文様は頸部に2連止め簾状文を施文した後に、口縁部・胴部ともに上から下に波状文を施文している。4は胴下半で外面は斜ハケ整形後施文されその後縦篦磨きがなされる。内面は雑な篦磨きがなされ、底部は篦削りで仕上げられている。

蓋　(7)　端部を若干欠損するがほぼ完形で、つまみ部には2㎜前後の焼成前穿孔がなされる。体部は内外面とも比較的ていねいに篦磨きされ、つまみ部上面はナデ整形される。

高坏　(5・6)　5は坏部中位に明確な稜をなして立ち上がりつつ大きく外反する口縁部形態をとる。端部には山形突起が1個認められるが本来は4ヶ所配置されていたものと考えられる。内外面とも篦磨き・赤彩される。6は脚部で端部は面とりされた後強くナデられる。外面は細か

い縦篦磨き、内面はハケ後ナデ整形される。

以上の出土土器の様相より、本住居址は弥生時代後期・箱清水式期に位置づけられよう。

4号住居址上層出土土器（図14）

4号住居址の遺構にて述べたとおり、一括出土の状況で得られた平安期の土器については4号住居址上層出土土器として扱い、ここでその概要について述べておきたい。

坏　（1・2）　ともに土師器で、1は口径13cm。口縁端部にて短く外反して終わる形態をとり、口縁部外面と内面は篦磨きされ、外面体部下半には一帯の篦削りがなされる。2の内面はていねいな篦磨きがなされ、底部ならびに底部周辺は回転篦削りで仕上げられる。

甕　(3)　土師器で内外面ともにロクロナデで仕上げられ成形時に生ずる段差を顕著に残している。底部には回転糸切り痕をとどめる。

鉢　(4)　土師器で体部は底部より内湾ぎみに立ち上がり、口縁部にてさらに強く内湾して終わる。器壁は1～1.5cmと厚くがっしりしたつくりである。内外面ともていねいな篦磨きがなされ黒色処理される。口径19.6cm。

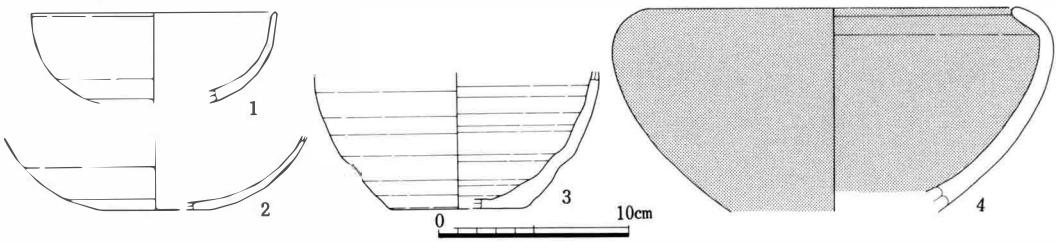


図14　4号住居址土層出土土器

5号住居址

遺構　（図15）

第II区中央付近にて検出された住居址で、上層は6号住居址に切られるが床面にまでは撹乱は及んでいない。また東側は大半が調査区域外となる。平面プランは（長）方形を呈し、確認された範囲での規模は長軸3.10m・短軸約2.25mである。検出面からの掘り込みは25cm前後で柱穴等は検出されなかった。床面は砂まじりの暗黄褐色の粘質土が貼られていたがさほど顕緻な状況ではなく、壁際は不明瞭となる。実測図中破線で示した部分には、焼土・灰とともにかなりの量の獣骨片が検出されたが、炉と思われる掘り込み等は存在しなかった。床面に接する状態でほぼ完形の高坏(3)が出土している。

遺物　(図16・17)

甕　(1・2・5・6)　1は頸部から緩やかなくの字状をなして外反する口縁部形態をとり、端部は面とりされる。胴上位はやや強く張りこの部分に最大径を有する。外面胴下半と内面は全体に箆磨きされる。文様は頸部に3連止めの簾状文施文後、口縁部には3帯、胴部には4帯の波状文をそれぞれ上から下へ施文する。口径19.4cm。2の口縁部は頸部から外反しつつも直に近く立ち上がり端部に至ってやや外反の度合を増す。外面はハケ整形後ナデられ、内面はハケ整形後斜めから横の箆磨きがなされる。文様は波状文が下から上へ3帯施文されるのみで頸部簾状文はない。口径14.4cm。5・6はともに底部で底面まで箆磨きで仕上げられる。

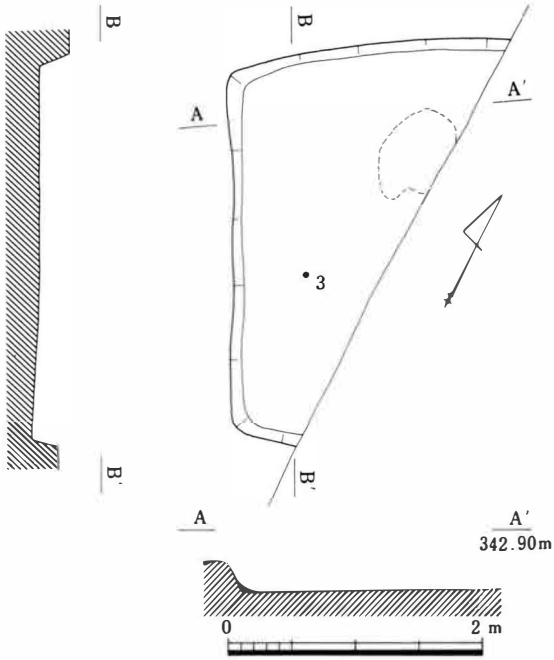


図15　5号住居址実測図

高坏　(3・4)　3は口縁部と脚部の一部を欠損するがほぼ完形である。坏部は底部から直線的に外開し端部にて内湾ぎみに立ち上がり、断面逆三角形状を呈する。脚部は短いがハの字状に比較的大きく外開し、端部は丸く終わる。坏部と脚部の接合部には粘土紐張り付けによる断面三角形状の突帯が2帯施される。脚部内面に至るまで全面にわたってていねいな箆磨きがなされ赤彩される。口径12.1cm・脚裾部径8.4cm・器高12.5cm。4は内外面ともハケ整形されるのみで器

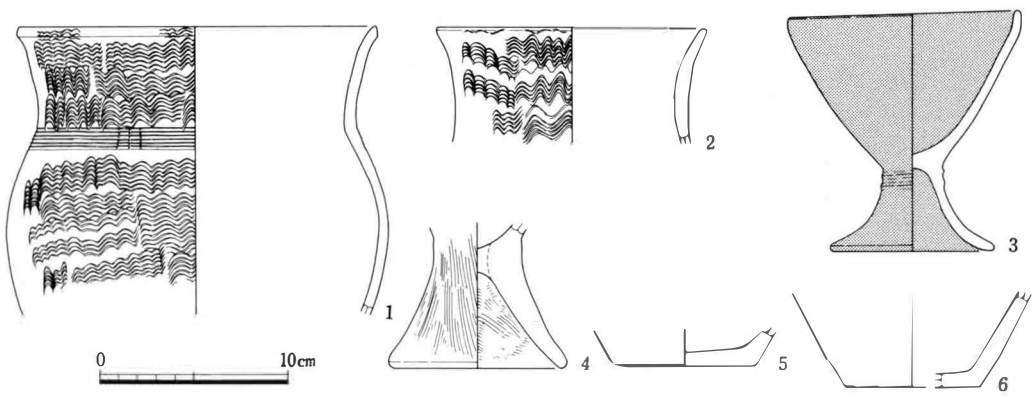


図16　5号住居址出土土器実測図

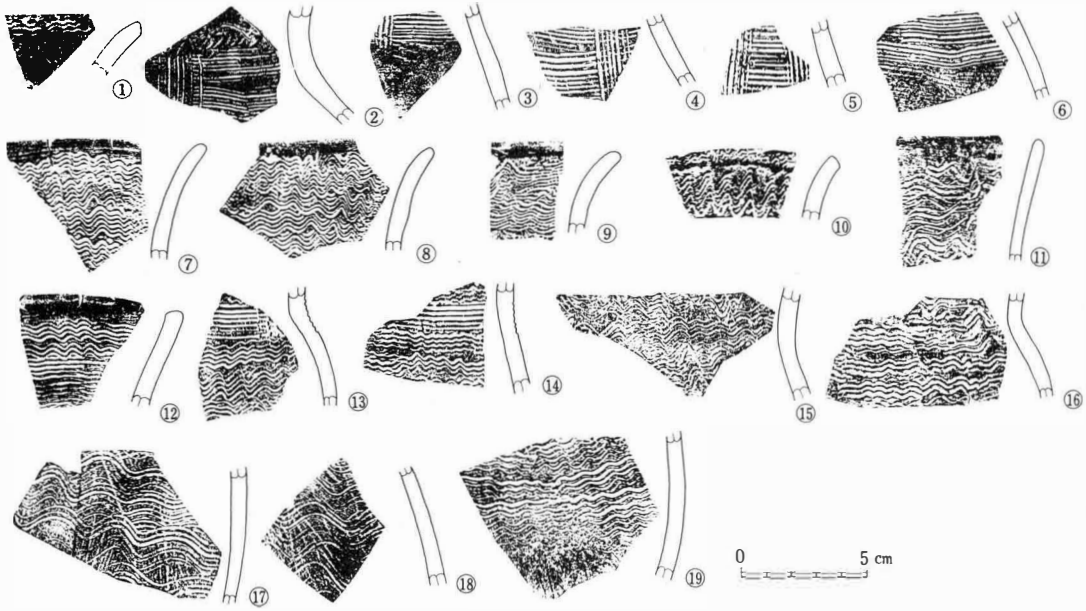


図17　5号住居址出土土器拓影

壁も厚く、非常に粗雑な感じの土器である。

以上出土土器の様相よりすれば、本住居址は弥生時代後期・箱清水式期に位置づけられる。

6号住居址

遺構　（図18）

II区中央付近で検出され、5号住居址を切って構築されている。また東側⅓ほどは調査区域外となる。平面プランは一辺3.0mほどの隅丸方形と思われ主軸はN－16°－Wである。検出面からの掘り込みは北壁18cm・西壁15cm・南壁15cmほどである。床面は軟弱で不明瞭であり、周溝・柱穴等も検出されなかった。住居址北隅より床面に接した状態で30×40cmほどの扁平な自然石と河原石が出土している。作業台的な機能をもつものであろうか。

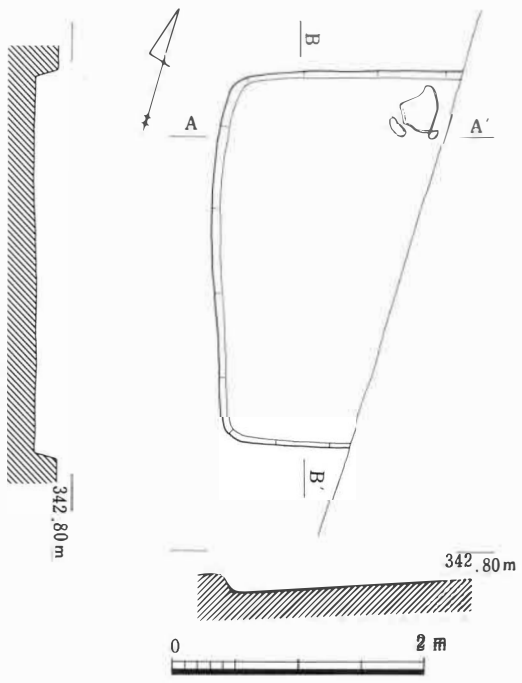


図18　6号住居址実測図

遺物　（図19・20）

壺　（1・3）　1は頸部から短く緩やかに外反し端部は尖り気味に終わる口縁部形態

を呈する。口縁端部は強く横ナデされ、口縁部は内外面ともハケ整形後ナデ整形されるのみで篦磨き・赤彩等はなされない。文様は頸部に一帯の櫛描直線文が認められのみである。口径11.4cm。3は底部で外面はハケ後ナデ整形、内面はていねいなナデ整形がなされ、底部は篦削りによって仕上げられる。

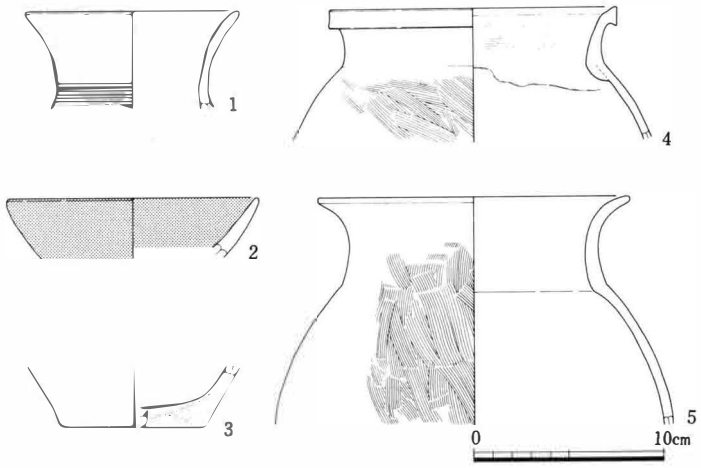


図19　6号住居址出土土器実測図

甕　（4・5）　4の口縁部は頸部より短く直立ぎみに外反し、端部はつまみ上げ気味に強く横ナデされやや幅広の面が形成される。外面胴部から口縁部への移行は比較的緩やかであるが、内面には接合痕が顕著に残されている。また最大径は胴部に有する。口縁端部ならびに口縁部外面は強い横ナデ整形がなされ、胴部は斜方向のハケ整形がなされる。口縁部内面は横ハケ後ナデられ、胴部内面はナデ整形される。口径15.2cm。5の口縁部は頸部より直立ぎみに立ち上がったのち端部付近にて強く外反する形態をとり、端部は丸く終わる。外面胴部と口縁部の境はさほど明瞭ではないが内面はくの字状に屈曲し、緩い稜を形成する。胴部はさほど張らぬが胴上位に最大径をもつものと思われる。口縁部は内外面とも強い横ナデがなされるのみで外面は頸部付近から胴上半にかけて斜めから縦方向の細かいハケ整形がなされる。内面は頸部屈曲部以下のみ横方向の篦磨き整形がなされる。器壁は内外面とも黒褐色を呈し、黒色処理されたかのような感じを与えるほどである。

本住居址は出土土器の様相より弥生時代終末から古墳時代初頭に位置づけられよう。

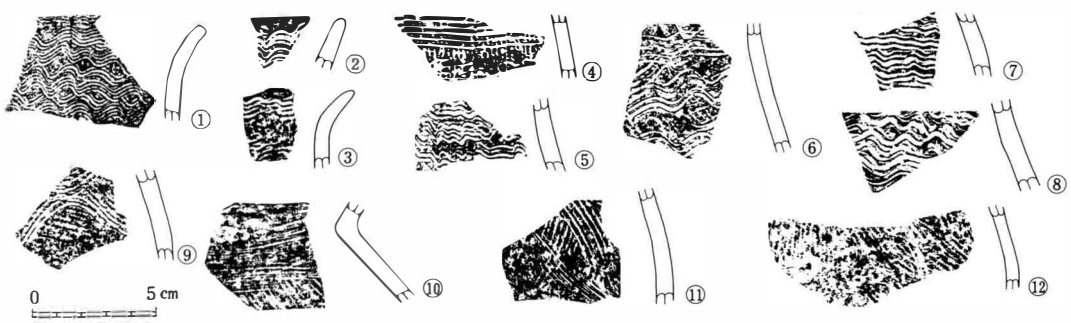


図20　6号住居址出土土器拓影

7号住居址

遺構　(図21)

II区北端付近より検出された住居址であるが、後世の撹乱と大半が調査区域外となるためにその一部を検出し得たにすぎない。平面プランは隅丸（長）方形を呈すると思われるが、規模等の詳細は不明である。検出面からの掘り込みは浅く15cmほどである。住居址中央部付近を中心に貼り床がなされ、かなり堅緻な状態を呈していたが、壁際にいくにしたがい不明瞭なものとなる。柱穴等は検出されなかった。南壁際より30cmほどの大きさの自然石が組み合わされた状態で出土し、また周囲には炭化物・焼土等も若干検出されたがカマドとして把握できるものではない。遺物はほとんどが床面より5cmほど浮いた状態で出土している。

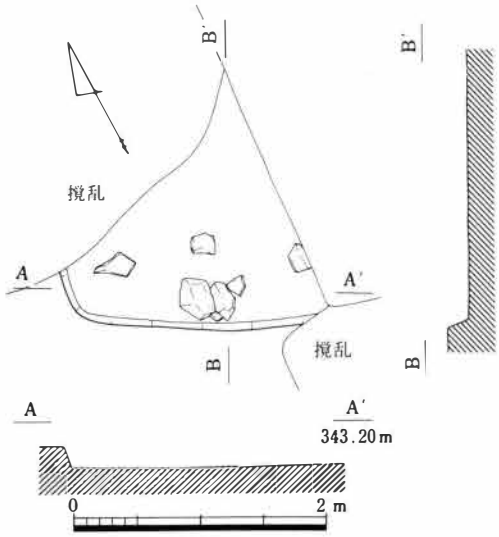


図21　7号住居址実測図

遺物　(図22)

高台付坏　（1・5～7）　1は口径15.3cm・底径8.3cm・器高6.0cmである。坏部は内湾ぎみに立ち上がり端部にて若干外反する形態をとる。口縁部内外面のみ横篦磨きが加えられ、他はロクロナデのままである。坏部内面には暗文が施され黒色処理される。5～7はいずれも底部であり5・7は内面がていねいに篦磨きされ黒色処理される。底部は切り離し後ていねいにナデられるが6には回転糸切り痕が認められる。

坏　（3・4）　ともに坏部中位で屈曲して口縁部が外開する形態をとる。内外面とも雑なロクロナデで仕上げられ黒色処理はなされていない。3は口径10.1cm、4は口径11.4cm・底径4.9cm・器高4.2cmである。

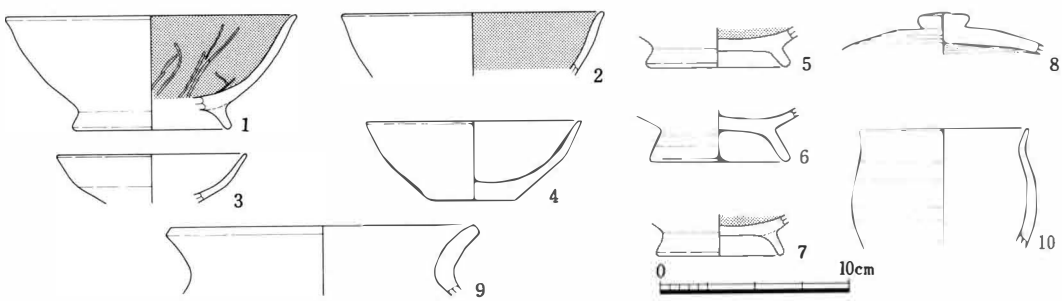


図22　7号住居址出土土器実測図

蓋　(8)　須恵器で扁平な擬宝珠形つまみをもち、天井部は回転篦削りされる。

甕　(9・10)　10は小型甕で口縁部は頸部より短くくの字状に外反し端部は尖る。胴中位に最大径を有し、内外面ともロクロ痕を顕著にとどめている。

本住居址は出土土器より平安時代の所産ととらえられる。

8号住居址

遺構　(図23・24)

III区南端にて検出された住居址で、大半は調査区域外となる。平面プランは隅丸(長)方形を呈すると思われるが、規模等の詳細は不明である。床面は軟弱で不明瞭であったが、中央付近に砂まじりの暗黄褐色粘質土が比較的均一に認められ、この面をもって床と判断した。柱穴状の小ピットが一つ検出されたが床面からの掘り込みも浅く、性格は不明である。床面より若干浮いた状態で図24に示した甕形土器が出土している。

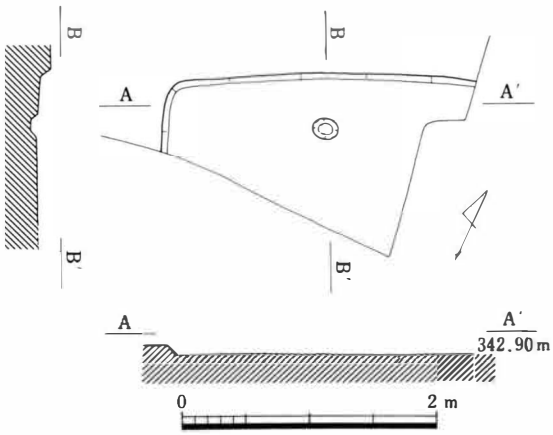


図23　8号住居址実測図

遺物　(図24・25)

甕。口縁部は頸部より内傾ぎみに立ち上がり、端部にて緩やかに外反して終わる。また端部は強くナデられ尖り気味である。胴部は内面頸部に緩やかな稜を形成して強く張り出し、胴上位に最大径をもつものと思われる。内面は全体に横から斜方向のていねいな篦磨き整形がなされる。文様は櫛描波状文を下から上に施文しており、頸部簾状文は施文されない。

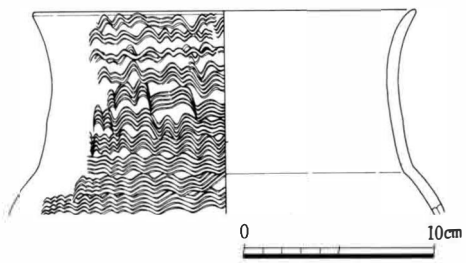


図24　8号住居址出土土器実測図

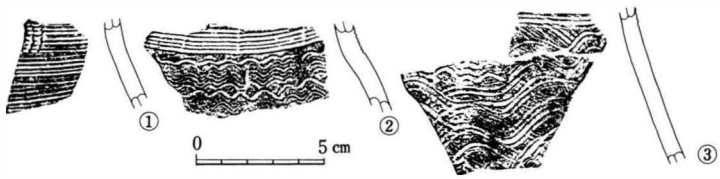


図25　8号住居址出土土器拓影

出土土器よりすれば本住居址は弥生時代後期箱清水式期の所産と考えられる。

9号住居址

遺構　(図26)

III区で検出された住居址で北側は5号溝址に切られ、東側は調査区域外となる。平面プランは一辺約3.50mほどの隅丸方形を呈すと思われ、検出面からの掘り込みは20～28cmを測る。床面は軟弱で不明瞭であったが、8号住居址と同様な砂まじりの暗黄褐色粘質土が認められ、この面をもって床面と判断した。柱穴等の諸施設は検出し得なかった。

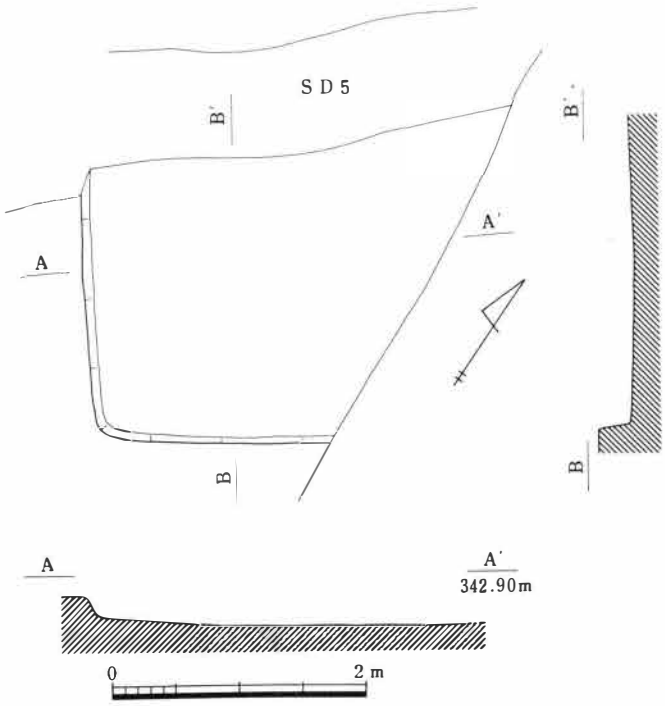


図26　9号住居址実測図

遺物　(図27)

甕　(1・2・4・5)　1の口縁部は頸部からくの字状に直線的に外開し、端部は面とりされる。口縁部外面は強い横ナデ整形がなされ、その後頸部から胴部にかけて縦方向の細かいハケ整形がなされる。口縁部内面は横ハケ整形後篦磨きされ、胴部内面はナデ整形される。口径15.0cm。2は口縁部はやや大きく外反し端部は丸く終わる。口縁部外面は横ナデされ内面はハケ整形後ナデられる。口径16.8cm。4・5はともに底部破片である。

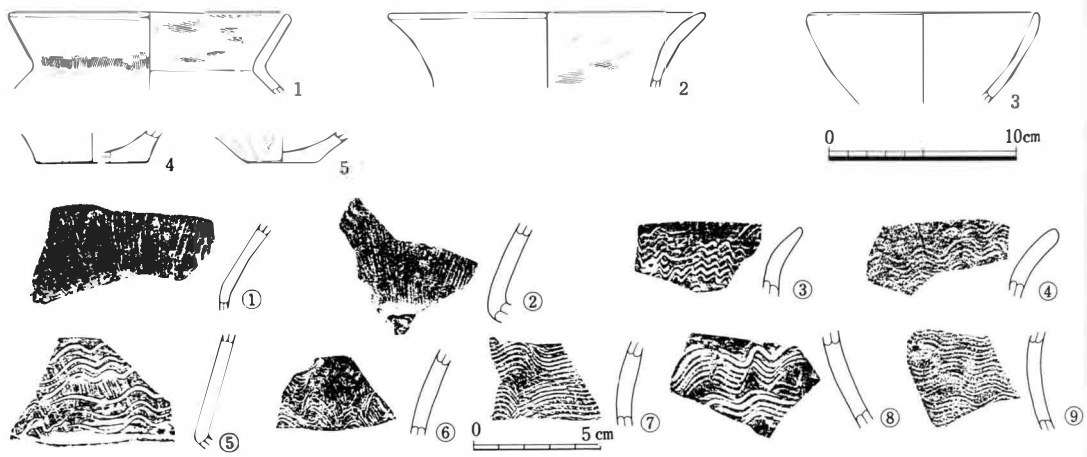


図27　9号住居址出土土器実測図・拓影

坏　(3)　体部は内湾ぎみに立ち上がり、内外面ともていねいに篦磨き整形される。

本住居址は出土土器より古墳時代初頭の所産ととらえられる。

1号土壙

遺構　(図28)

Ⅰ区南端で検出されたもので、2号土壙を切って構築されている。東南端は調査区域外となるが、長軸2.25m・短軸1.40mの長楕円形プランを呈する。掘り込みは3段にわたってなされ北側にいくに従って深さを増す。深さはそれぞれ27cm・34cm・44cmを測る。

遺物は覆土中より栗林式土器の小破片が出土しているが、箱清水式期の2号土壙を切って構築されていることよりすれば明らかに混入品であり、時期を決定し得る明確な資料はない。

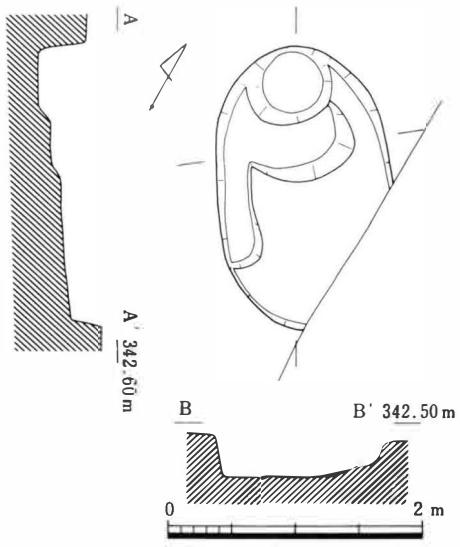


図28　1号土壙実測図

2号土壙（甕棺墓）

遺構　(図29)

土壙として扱ったが弥生時代後期・箱清水式期の甕棺墓である。東南部を1号土壙に切られるが平面プランは長軸約1.40m・短軸0.95mほどの楕円形を呈するものと思われる。墓壙の主軸はN－35°－Wであるが、甕棺自体は南側を上にしてほぼ南北方向に埋置されていた。大型の甕形土器に壺胴部下半を被せた状態で出土している。覆土は暗黄灰色の砂質土一層であった。

遺物　(図30)

甕　(2)　ほぼ完形品で口径27.6cm・底径12.8cm・器高41.2cm・最大径28.6cmである。口縁部は頸部から緩やかに外反し端部は丸く

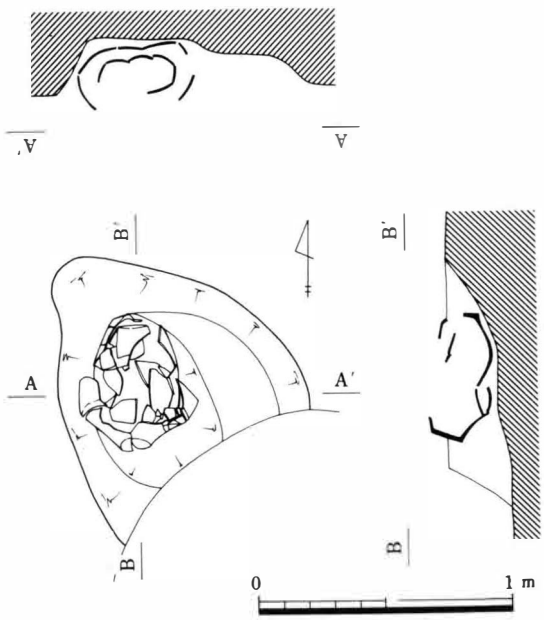


図29　2号土壙（甕棺墓）実測図

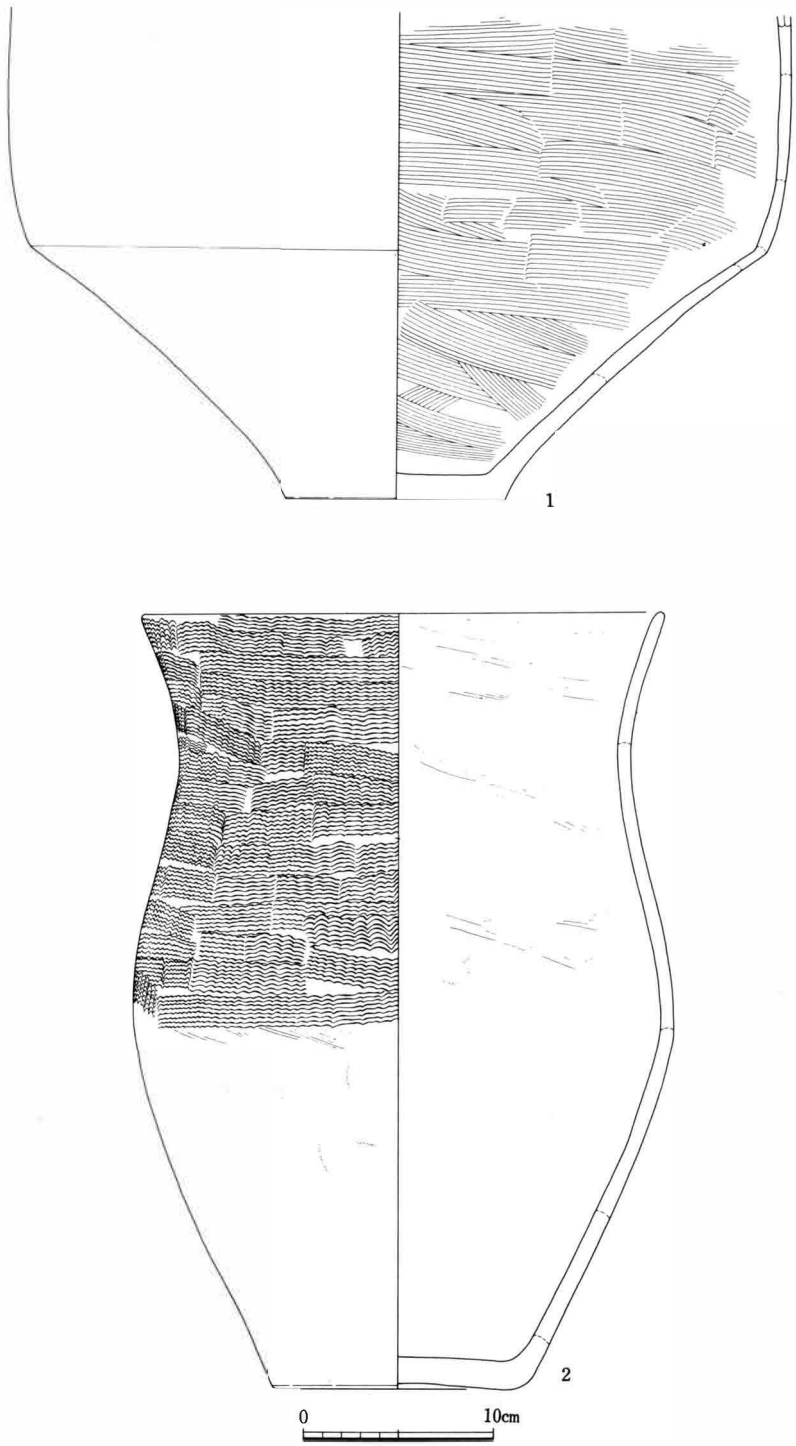


図30　2号土壙（甕棺墓）出土土器実測図

終わる。頸部から胴部への移行はスムーズで、胴部の張りはさほど強くないが胴中位に最大径を有する。外面胴下半はハケ整形後縦篦磨きがなされ、内面もハケ整形後全体に篦磨きがなされる。底部は上げ底気味で、篦削り後部分的にナデ整形される。文様は胴部最大径付近まで波状文が施文されるのみで、頸部簾状文は認められない。波状文は基本的に上から下へ施文するが部分的に後の描き加えがなされ、統一のとれぬ箇所もある。

壺　(2)　胴中位以上を欠損する。胴下半で鋭くくびれて、以下底部へ内反り気味に収納する形態をとり、くびれ部には鋭い稜を形成する。外面は全体に斜めから縦方向の篦磨きがなされる。内面は全体に横方向のハケ整形がなされるが、器面の剥落が厳しく実測図は推定によるところが大きい。底径11.6cm・残存高25.7cm。

3号土壙

遺構　(図31)

径0.85mほどのやや不整な円形を呈する。検出面からの掘り込みは浅く15cm前後である。遺物等の出土もなく時期、性格等不明である。

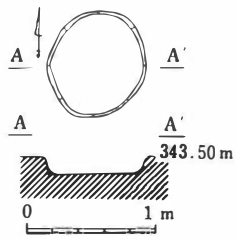


図31　3号土壙実測図

4号土壙

遺構　(図32)

東側は調査区域外となり詳細は不明だが、一辺約1.3mほどの不整な方形プランを呈するものと思われる。検出面からの掘り込みは22～24cmほどで、覆土はしまりのない黒褐色砂質土層であった。遺物はいずれも覆土内より出土している。

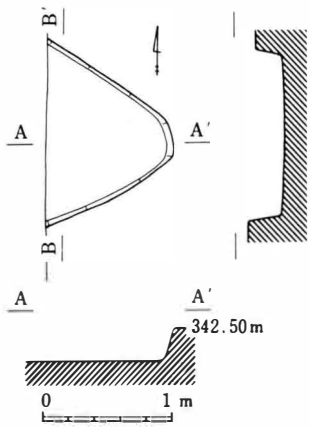
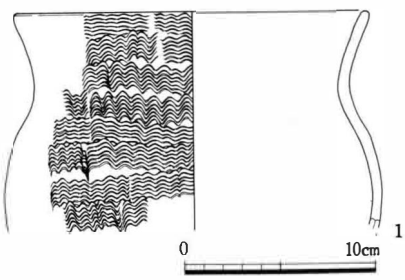


図32　4号土壙実測図

遺物　(図33)

実測し得たのは図33に示した甕のみで、口径18.8cmの中型品である。口縁部は頸部より緩やかなくの字状をなして外反する。胴部はやや張りをもち、胴上位に最大径を有する。内面は口縁部・胴部ともに横方向の篦磨き整形がなされる。文様は櫛描波状文を口縁端部から胴部まで、上から下の順序に施文しているのみで頸部簾状文は施文されない。

この他かなりの量の小破片が出土しているが、本土壙は弥生時代後期箱清水式期の所産ととらえる。



1

図33　4号土壙出土土器実測図

5号土壙

遺構

土壙として扱ったが、実際上はプラン等は明確には確認できず、径50cmほどの範囲内に図34に示した1の土器に重なり合った状態で2・3の土器が検出されたものである。

遺物　(図34)

壺　(1・2)　1は口縁部を欠損するが底径9.9cm・残存高32cm・胴部最大径26.5cmである。胴中位からやや下がった所に最大径を有し、それ以下底部へ直線的に集約してゆく器形を呈する。外面は文様帯部分を除き全体にハケ整形後篦磨きされる。内面は頸部は篦磨きされるが胴部は全体にハケ整形後横ナデされ、胴下半には横から斜め方向のハケ整形痕を顕著にとどめている。頸部文様には篦切りT字文が施されるが、櫛描直線文は現状では4帯まで確認できる。2は口頸部であるが図示した部分はほぼ完存する。朝顔状に大きく外反する口縁部形態と思われる。外面は縦、内面は横の篦磨きが施されるが赤彩は認められない。頸部にはT字文が認められる。1・2ともに器面には鉄分の付着が著しく詳細は不明である。

甕　(3)　口縁部を欠損するが底径8.4cm・残存高18.5cm・胴部最大径20.8cmである。胴上位が強

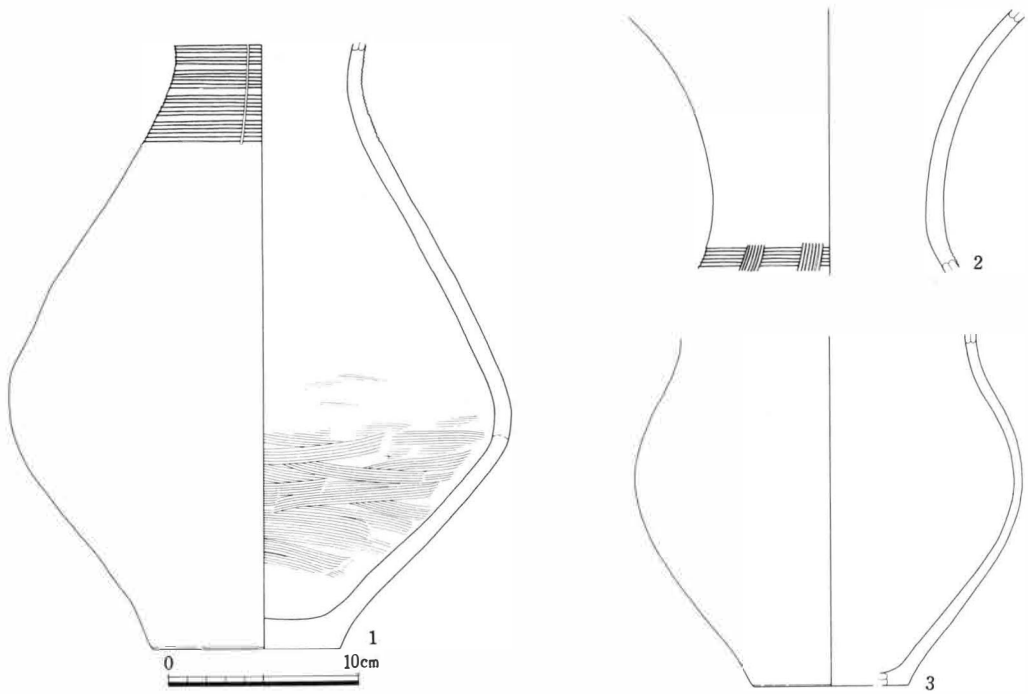


図34　5号土壙出土土器実測図

く張り、以下底部へ直線的に集約してゆく。外面と内面胴上位は全体にハケ整形後ナデられ、内面胴下半には軽い篦磨きが加えられるようである。文様は施文されずやや特異な土器である。出土土器の様相より弥生時代後期箱清水式期の所産ととらえられる。

6号土壙

遺構　(図35)

1.15×1.0mほどの円形を呈する。検出面からの掘り込みは50cmほどを測り、掘り込みも直に近い。覆土は暗茶褐色砂質土一層であった。

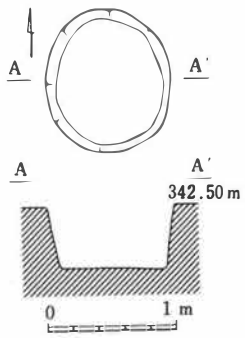


図35　6号土壙実測図

遺物　(図36)

壺　(1・2)　1は口縁部で朝顔状に外反する形態をとるが端部は若干内湾ぎみに立ち上がる。内外面とも横篦磨きされ赤彩される。2は肩部で外面はハケ整形後篦磨きされるが内面は剥落激しく詳細は不明である。頸部には櫛描直線文が一帯確認できるがT字文であるか否かは不明である。

甕　(3)　口縁部は頸部から直線的にやや長く外反し、口縁部に最大径を有する。内面は全体に横篦磨きされる。文様は頸部に等間隔止め簾状文を施し、口縁部と胴部に波状文を施文するが、器面の磨耗が著しく施文順序等の詳細は不明である。

以上出土土器の様相よりすれば本土壙は弥生時代後期・箱清水式期の所産ととらえられる。

図36　6号土壙出土土器実測図

7号土壙

遺構　(図37)

1.05×0.80mほどのやや不整な楕円形状を呈する。検出面からの掘り込みは25cm前後で直に近く掘り込まれる。底面より人頭大の河原石が出土している。

覆土内からは弥生時代後期・吉田式期の土器片が出土しているが小破片である。

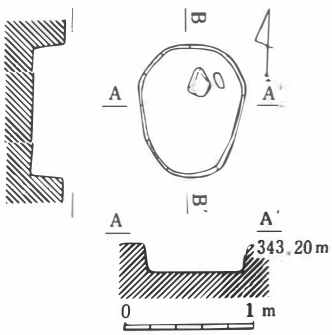


図37　7号土壙実測図

8号土壙

遺構　（図38）

0.80×0.60mほどのやや不整な円形を呈する。検出面からの掘り込みは30cmほどで、掘り込みは直に近い。覆土はしまりのない黒褐色土一層であった。覆土内からは弥生式土器・土師器等の破片が出土しているが、いずれも小破片であり時期決定の資料とはなり得ない。

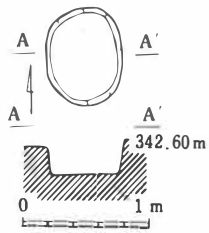


図38　8号土壙実測

9号土壙

遺構　（図39）

径0.75mほどの円形を呈する。検出面からの掘り込みは浅く10cmほどである。底面からは拳大の円礫や角礫が検出されたが組み合わされたような様子もなく性格は不明である。また若干の骨片が覆土内より検出されている。覆土内からは回転糸切り痕を残す土師器坏や須恵器坏の破片が出土している。平安時代の所産と考えておきたい。

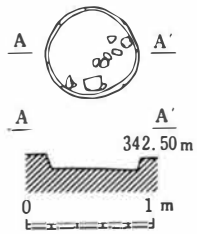


図39　9号土壙実測図

10号土壙

遺構　（図40）

長軸2.0m・短軸1.0mほどの不整楕円形を呈する。検出面からの掘り込みは浅く10cmほどである。覆土内からは弥生式土器・土師器の小破片が出土しているが、時期を特定し得る資料はない。

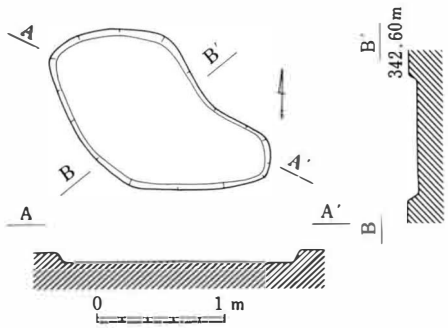


図40　10号土壙実測図

11号土壙

遺構　（図41）

径1.05mほどの不整円形を呈する。検出面からの掘り込みは浅く深さ10cm前後である。覆土内から平安時代のいわゆる「武蔵型甕」の小破片が出土している。

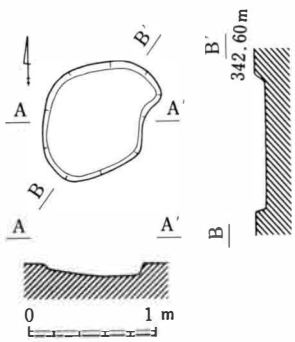


図41　11号土壙実測図

12号土壙

遺構　(図42)

北西端は調査区域外となるが平面プランはやや不整な隅丸長方形を呈し、規模は長軸5.30m・短軸1.80mである。内部にはさらに径1.50mほどの不整形な掘り込みが2つ検出された。覆土中には多量の炭化物が含まれていたが、特に2つの掘り込みからはともに灰や炭化物が多量に検出され、獣骨片等も出土している。

遺物　(図43・44)

壺　(1・2・9)　1・2はともに朝顔状に大きく外反する口縁部で、内面は横篦磨きされるが外面はナデ整形されるのみで赤彩もされない。

高坏　(3～5)　3は坏部中位に明確な稜をなして口縁部が強く外反する形態をとる。内外面とも篦磨きされるが赤彩はされていない。

甕　(6・8)　ともに内外面ともていねいな篦磨きがなされるが、6は底部まで篦磨きで仕上げられている。

甑　(7)　底部破片であるが底部に焼成前穿孔が一孔認められる。内外面とも篦磨きされ底部はていねいにナデ整形される。

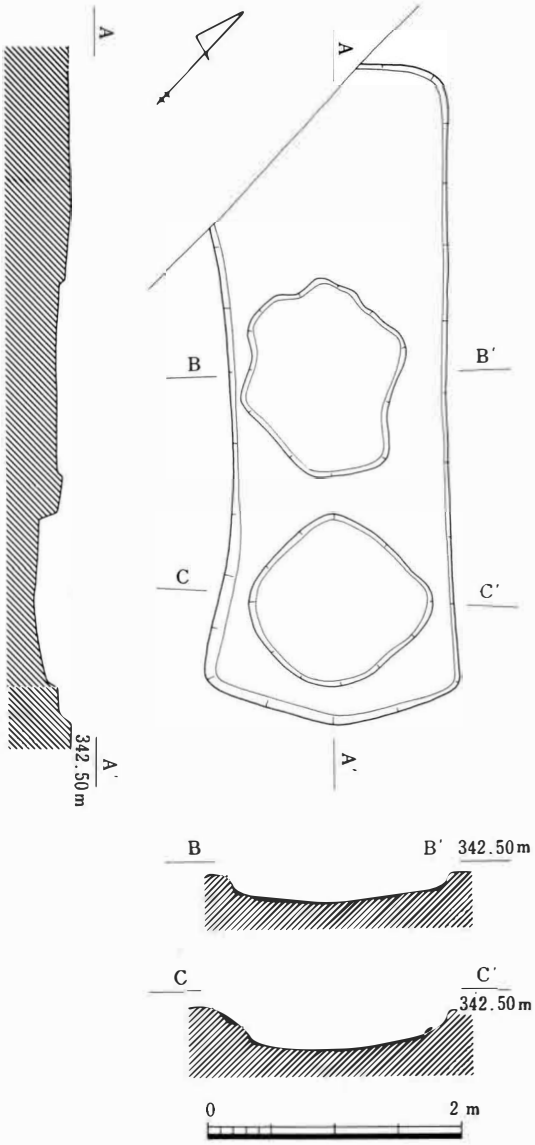


図42　12号土壙実測図

出土土器の様相から本土壙は弥生時代後期に位置づけられよう。

13号土壙

遺構　(図47)

不整な方形状を呈する土壙で、規模は長軸2.20m・短軸1.40mを測る。中央部にはさらに長軸

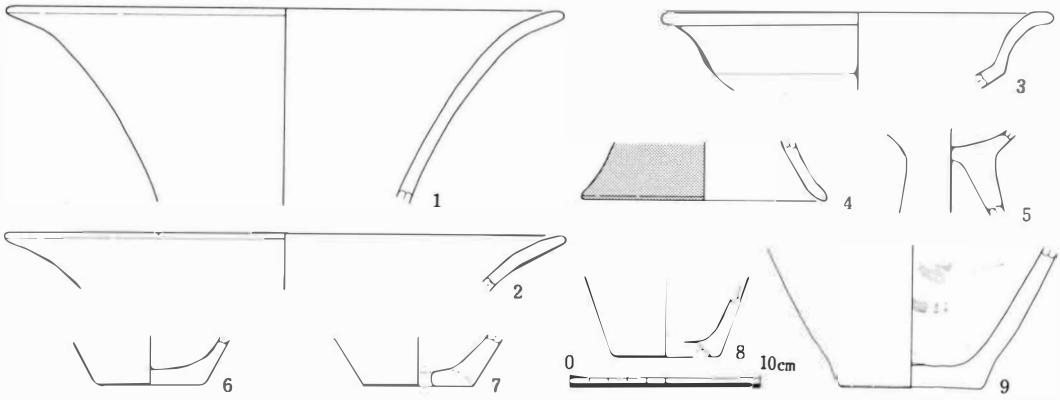


図43　12号土壙出土土器実測図

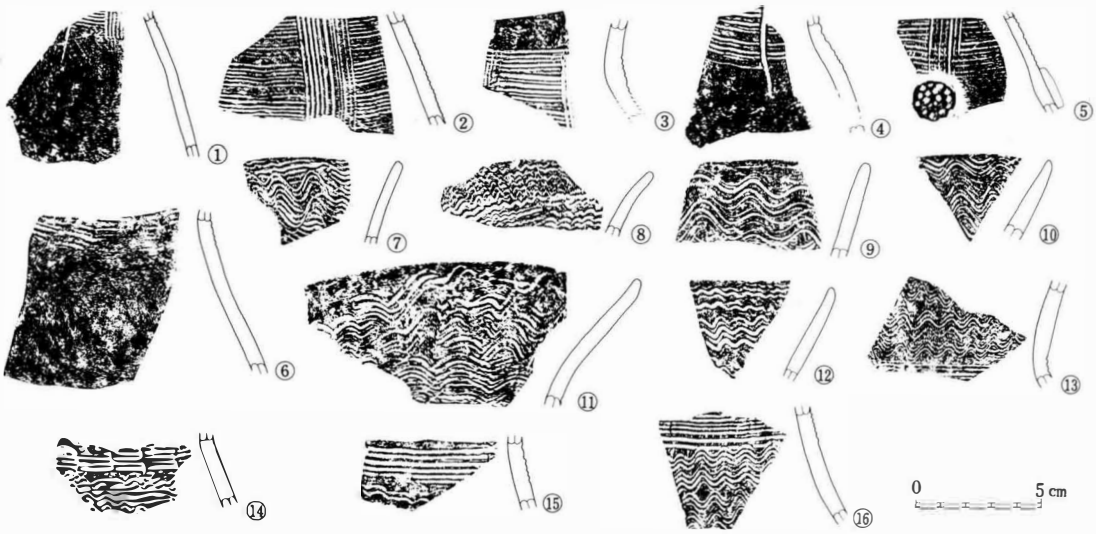


図44　12号土壙出土土器拓影

0.45mほどの楕円形の浅い掘り込みを有する。検出面からの掘り込みは浅く15cmほどである。覆土はしまりのない黒褐色土であったが比較的顕著に炭化物が認められた。

遺物　(図45・46)

壺　(1～3)　1はさほど外反することなく直線的に外開する口縁部形態を呈する。内外面ともていねいな篦磨きがなされるが赤彩はされない。3は小型壺の底部と思われ、内外面とも篦磨きされ赤彩される。

高坏　(4)　脚部はさほど大きく開かぬが端部にて若干外反する。外面は篦磨き・赤彩され、内面はハケ整形後ナデられる。弥生時代後期・箱清水式期の所産と考えられる。

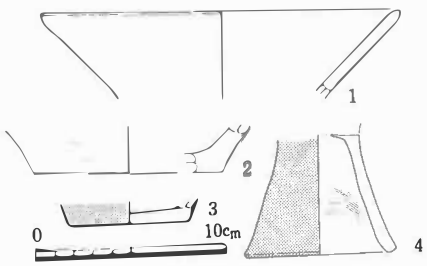


図45　13号土壙出土土器実測図

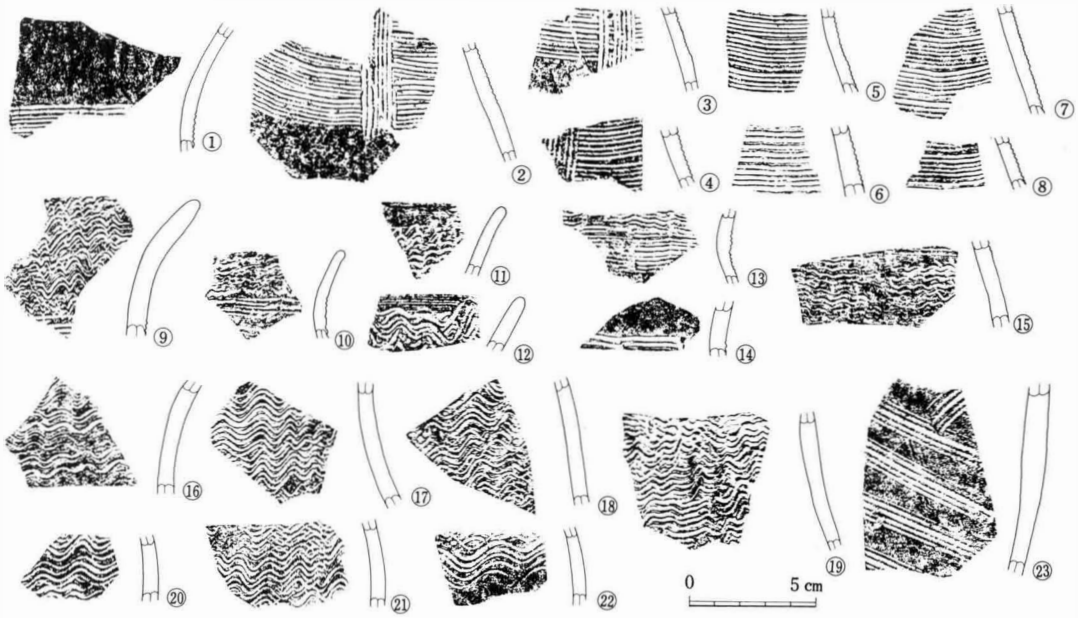


図46　13号土壙出土土器拓影

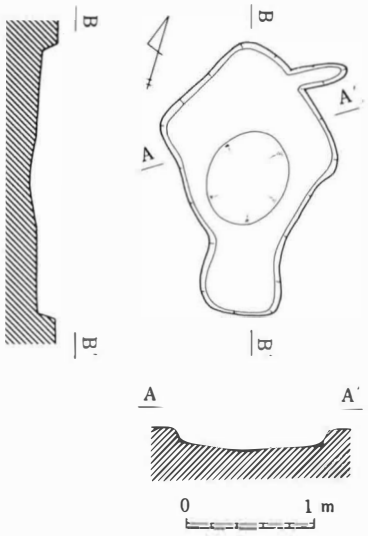


図47　13号土壙実測図

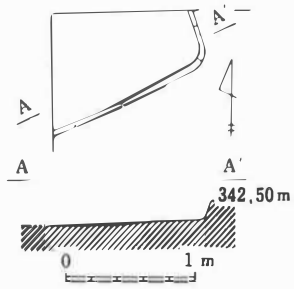


図48　14号土壙実測図

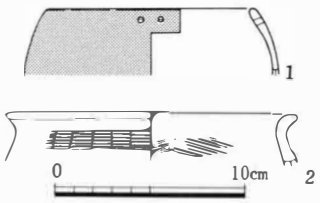


図49　14号土壙出土土器実測図

14号土壙

遺構　(図48)

I区北端で検出され大半は調査区域外となる。プランは隅丸方形を呈すると思われるが規模等

の詳細は不明である。検出面からの掘り込みは浅く15cm前後である。覆土内から灰や炭化物がかなりの量検出されている。

遺物　(図49)

無頸壺　(1)　口頸部は内傾して立ち上がり胴部は扁球形を呈するものと思われる。口縁部下端には2孔一対の円孔を有する。外面は篦磨き後赤彩され、内面は横ナデ後軽い篦磨きが加えられる。

甕　(2)　口縁部は頸部より短く外反して終わる中期的な形態をとる。頸部には等間隔止め簾状文が一帯施され、内面は斜方向のハケ整形後軽い篦磨きが加えられる。

本遺構からはこの他にかなりの破片が出土しているが実測し得たのは上記2個体のみである。出土土器からすれば弥生時代後期に位置づけられる。

15号土壙

遺構　(図50)

径0.80mほどのやや不整な円形を呈する。検出面からの掘り込みは浅く10cm前後で掘り込みもなだらかである。覆土はしまりのない黒褐色土であった。遺物等の出土もなく時期・性格等不明である。

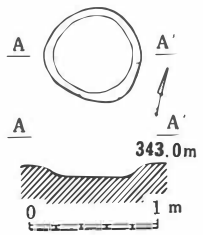


図50　15号土壙実測図

1号溝址

遺構　(図51)

I区南端で検出されたもので、両端はともに調査区域外となる。幅20～40cm、深さ15cm前後の小規模なもので、遺物も土器の小破片が出土したのみで、時期・性格等詳細は不明である。

2号溝址

遺構　(図52)

1号住居址の上層を切って掘削されたもので、東西はいずれも調査区域外となる。北東から南西へやや湾曲しつつ伸びてゆく形態を呈し、確認された範囲での規模は長さ4.80m、幅は最大2.0m・最小0.95mである。深さは北東側で30cm前後、南西側で15cm前後で南西にいくにつれて浅くなる。時期決定の根拠となる確実な資料は出土していない。

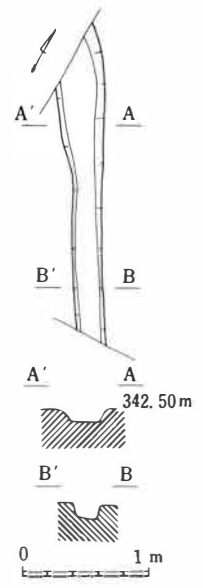


図51　1号溝址実測図

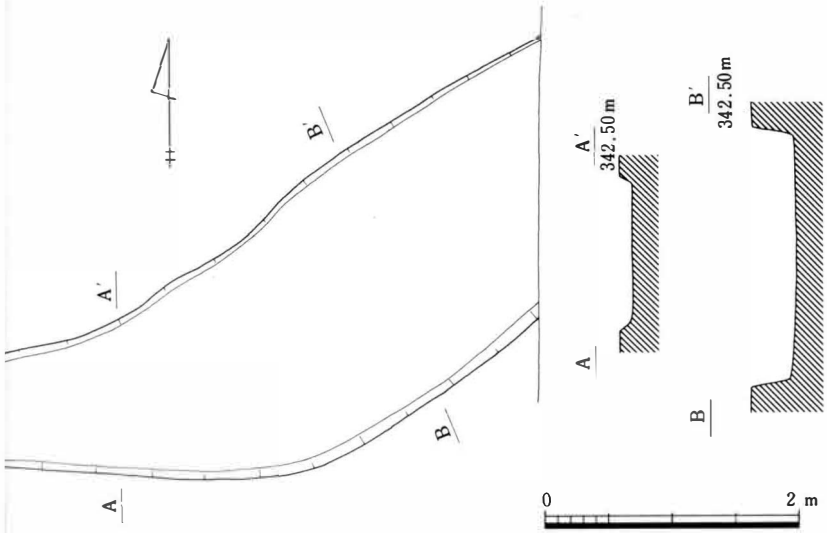


図52　2号溝址実測図

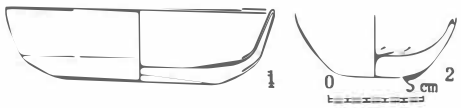
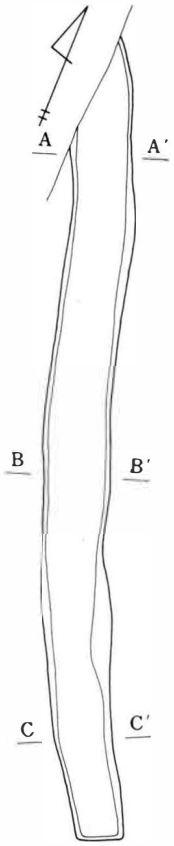


図53　3号溝址出土土器実測図



3号溝址

遺構　(図54)

5号土壙を切って掘削され、南東端は確認されたが北西端は調査区域外となる。南東から北西へわずかに蛇行しつつもほぼ直線的に伸びてゆく形態をとり、確認された範囲での規模は長さ約6.30m・幅平均0.50mほどである。溝底幅は0.35～0.50mで溝断面は逆台形状を呈する。遺物はいずれも溝底より5cmほど浮いた状態で出土している。

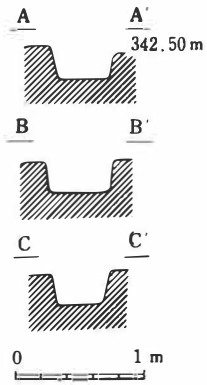


図54　3号溝址
実測図

遺物　(図53)

1は須恵器坏で口径14.2cm・底径8.5cm・器高3.7cm。口径に比して底径が大きくまた器高も低い。口縁部は坏部中位に緩やかな稜をなして直に近く立ち上がる形態をとり、口唇部は尖り気味に終わる。内外面ともロクロナデされ、底部には回転糸切り痕をとどめる。

2は土師器鉢もしくは甕の底部で、体部に比して底部は厚くつくられる。また不安定な丸底を呈する。外面は篦削り後ていねいなナデ整形がなされ、内面は篦による平滑化後ナデ整形される。

4号溝址

遺構　(図55)

III区南端で検出されたもので南側は調査区域外となる。北端は方形状に終わり、確認された範囲での規模は長さ2.80m・幅0.45m・深さ0.40mほどである。覆土はしまりのない黒褐色砂質土であり、溝址として扱ったが本遺跡で検出された他の溝址とは性格を異にするようである。遺物は弥生式土器の小破片が若干出土しているのみで、時期決定の根拠となる確実な資料はない。

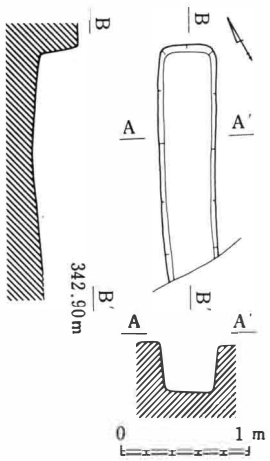
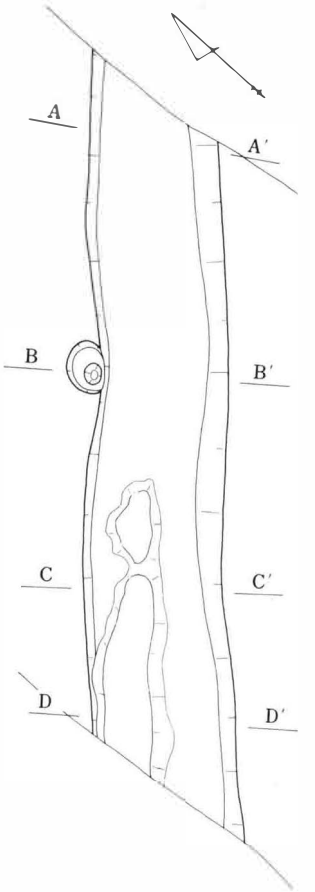


図55　4号溝址実測図

5号溝址

遺構　(図56)

9号住居址を切って掘削され、南西から北東へ直線的に伸びてゆく形態を呈するが、両端はともに調査区域外となる。確認された範囲での規模は長さ約5.50m、幅1.0～1.10mを測る。深さは平均15cm前後で、掘り込みも比較的なだらかである。南西隅付近の溝底は平坦ではなく細長いテラス状の高まりが認められるが性格は不明である。また北側中央付近に深さ20cmほどの柱穴が検出されたが、他には認められずこの溝址に関連あるものか否かは明らかにし得なかった。



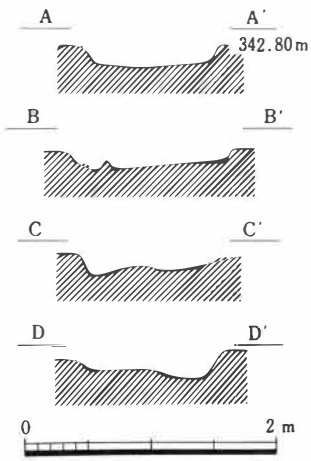


図56　5号溝址実測図

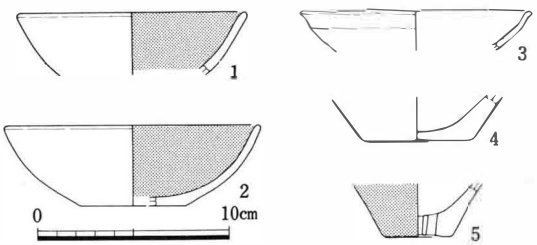


図57　5号溝址出土土器実測図

遺物　（図57）

1・2　ともに土師器坏で、内面は篦磨きされ黒色処理される。外面もともにロクロナデと思われるが磨耗が著しい。1は口径12.2cm、2は口径13.6cm・底径5.6cm・器高43cmである。

2　灰釉陶器皿。口縁部の小破片で詳細は不明だが、口縁端部は短く外反して終わる。

3は土師器甕底部。4は弥生時代後期箱清水式の甑で外面は篦磨き後赤彩され、底部には現状では4個の焼成前穿孔が認められる。

出土土器の様相より一応平安期の所産ととらえておきたい。

遺構外出土の土器

遺構外出土の土器は主として弥生時代・弥生時代終末～古墳時代初頭・平安時代に大別されるが以下主体となる弥生時代ならびに弥生時代終末～古墳時代初頭の、比較的遺存状況の良好なものを中心にその概要を述べておきたい。

弥生時代

壺　（1～28）　1～10は口縁部で、形態の上から朝顔状に大きく外反して終わる1～5と、口縁端部が受け口状に立ち上がる6～10に大別される。1は口縁端部が面とりされ一帯の櫛描波状文が施文される。内外面とも細かい篦磨きがなされるが赤彩はされない。10は外面に明確な稜を形成して口縁端部が立ち上がる形態をとり、端部は強く横ナデされて尖り気味に終わる。内外面ともハケ整形後軽い篦磨きがなされるが赤彩はされず、ハケ整形痕を顕著に残す。11～28はいずれも底部付近で、26～28は内外面とも篦磨きされ赤彩されている。

無頸壺　（29）　口縁部は内湾して終わり、体部は扁球形を呈するものと思われる。内外面とも篦磨きされ、赤彩される。

深鉢　（30・31）　ともに形態は甕と変わらぬが、内外面とも赤彩されるものである。30は口縁部が短く外反し、31は頸部から長めに立ち上がる形態をとる。

甑　（33・34）　ともに底部に一孔の焼成前穿孔をなす。35は内外面とも比較的顕著に横ハケ整形痕を残す点異質であり、他時代のものかもしれない。

甕　（35～56）　35～39は時期的には後期吉田式期の所産ととらえられる。35は口径16.0cm・残存高12.2cmで胴上位に最大径を有する。口縁部は受け口状に立ち上がり、強い横ナデが施されるのみで無文である。頸部には等間隔止め簾状文を一帯施し、胴部には縦位の羽状文が施文される。39は胴中位が強く張り出しやや特異な器形を呈する。胴上位に一帯波状文が認められるが他

は全体に篦磨きされる。40～47は後期箱清水式期のものである。40･41は小型甕で、40は口径10.4cm・底径5.3cm・器高10.4cmである。内外面とも器面の磨耗が著しく詳細は不明であるが、頸部に簾状文を施し、口縁部と胴部に一帯ずつ波状文を施文している。41は口径9.4cm・底径5.2cm・器高9.8cmで口縁部を欠損するがほぼ完形品である。頸部に直線文を施文した後、口縁部に波状文を一帯施文する。外面胴部と内面はていねいに篦磨きされる。44は甕であるが内面がていねいに篦磨きされ、赤彩される。外面は波状文を上から下に施文するが頸部簾状文は施文されない。口径13.7cm。46は大型品で口径30.4cm、残存高16.2cmである。口縁部は頸部から緩やかに立ち上がりつつ外反し、端部にて若干内湾ぎみとなる。頸部には3～4連止めの簾状文を施文した後、口縁部は上から下に波状文を施文している。47も大型品で頸部に2連止めの簾状文を施文し、口縁部と胴部に波状文を施文している。48～54はいずれも甕底部である。55・56は形態は台付甕であるが、ともに内外面とも篦磨きされ赤彩される。55は頸部に2連止め簾状文が施文され、56は胴中位に波状文が認められる。

蓋　(57～60)　57は笠形に大きく開く形態をとり、内外面ともハケ整形後ナデられ、外面には雑な篦磨きが加えられる。59は内外面ともていねいに篦磨きされ、58は内面のみ篦磨きされる。

高坏　(61～94)　61～73は坏部で形態の上から口縁端部にて強く外反する61～64と、内湾しつつ立ち上がって終わる65～73に大別される。74～94は脚部である。88は中位に櫛描直線文が施文され、93は脚端部に粘土帯が貼りつけられ複合口縁状を呈する特異なものである。

弥生時代終末～古墳時代初頭

装飾器台　(95)　外面上は3本の擬凹線文を施し、上下端ならびにその側面には篦状工具先端による刻みを施している。外面は全体に赤彩され、内面は横ナデされるのみである。

甕　(96～103)　96はいわゆる月影タイプの小型の甕である。口縁部外面は擬凹線ではなく横方向の粗い擦痕が認められるが、剝落が激しく詳細は不明である。外面胴部は篦削りされ、内面は全体にナデ整形と思われる。口径11.7cm。97・98はほぼ同一の形態をとり、口縁部はくの字状に外反する。外面は強く横ナデされ、内面はナデ後篦磨きが加えられる。99･100は端部がつまみ上げ気味に強く横ナデされ、やや幅広の面が形成されるものである。101・103は口縁部が鋭いくの字状をなして外反する形態をとり、内外面に粗いハケ整形がなされる。103の胴部にはその後篦による刻みがなされる。

高坏　(104～107)　104・105は同一個体と思われる。坏部は外面下端に鋭い稜をなして内湾しつつ立ち上がり、脚部は端部にて大きく外反する形態をとる。また脚には一周で6ヶ所ほぼ等間隔に穿孔がなされている。

坩　(108・109)　108は口縁部が直線的に外開し、内外面ともていねいに篦磨きされる。109は口縁部が端部にて内湾して立ち上がる形態をとり、頸部には断面三角形状の突帯が貼りつけられる。外面は軽い篦磨きがなされ、内面はナデ整形される。

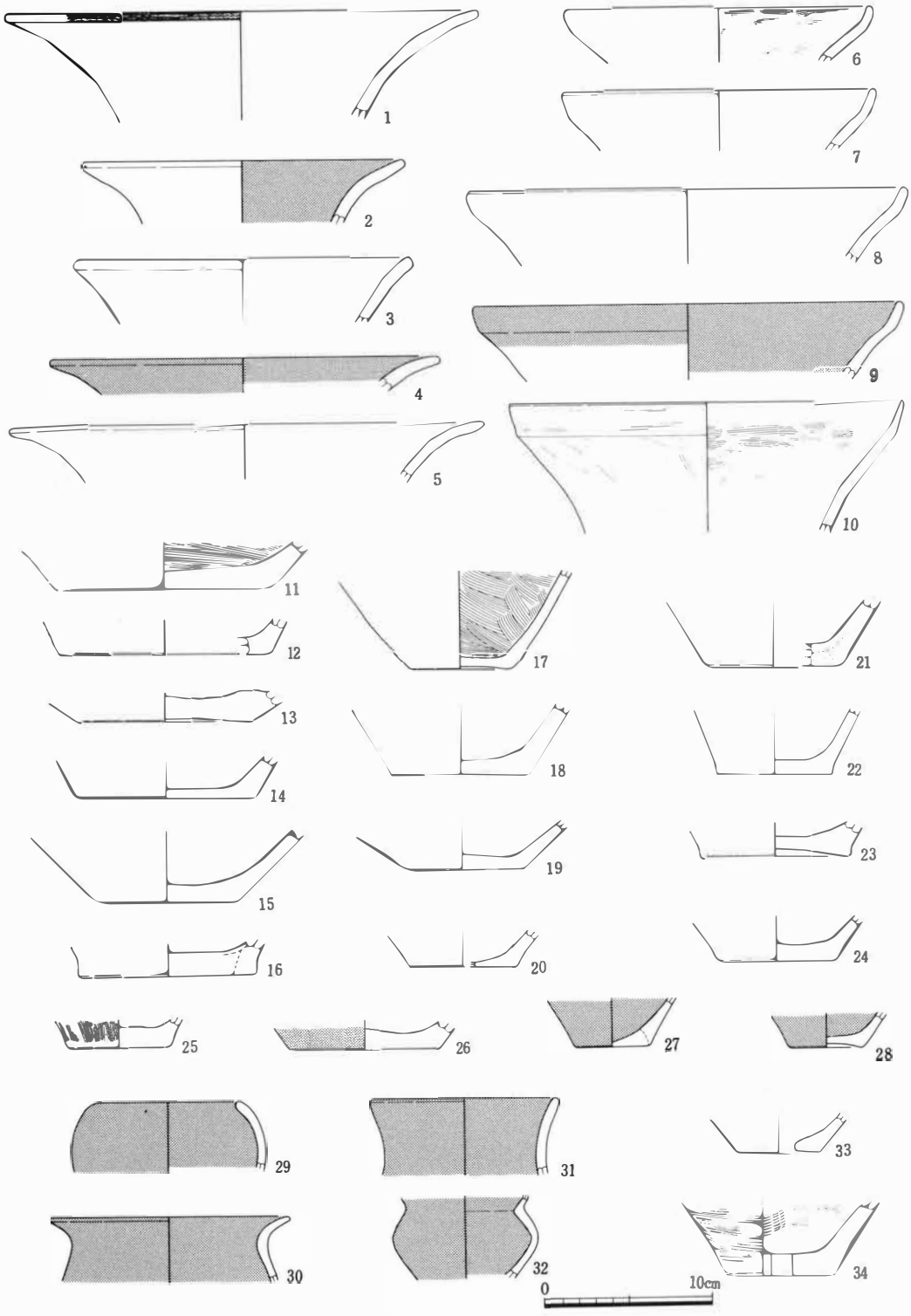


図58　遺構外出土土器実測図　①

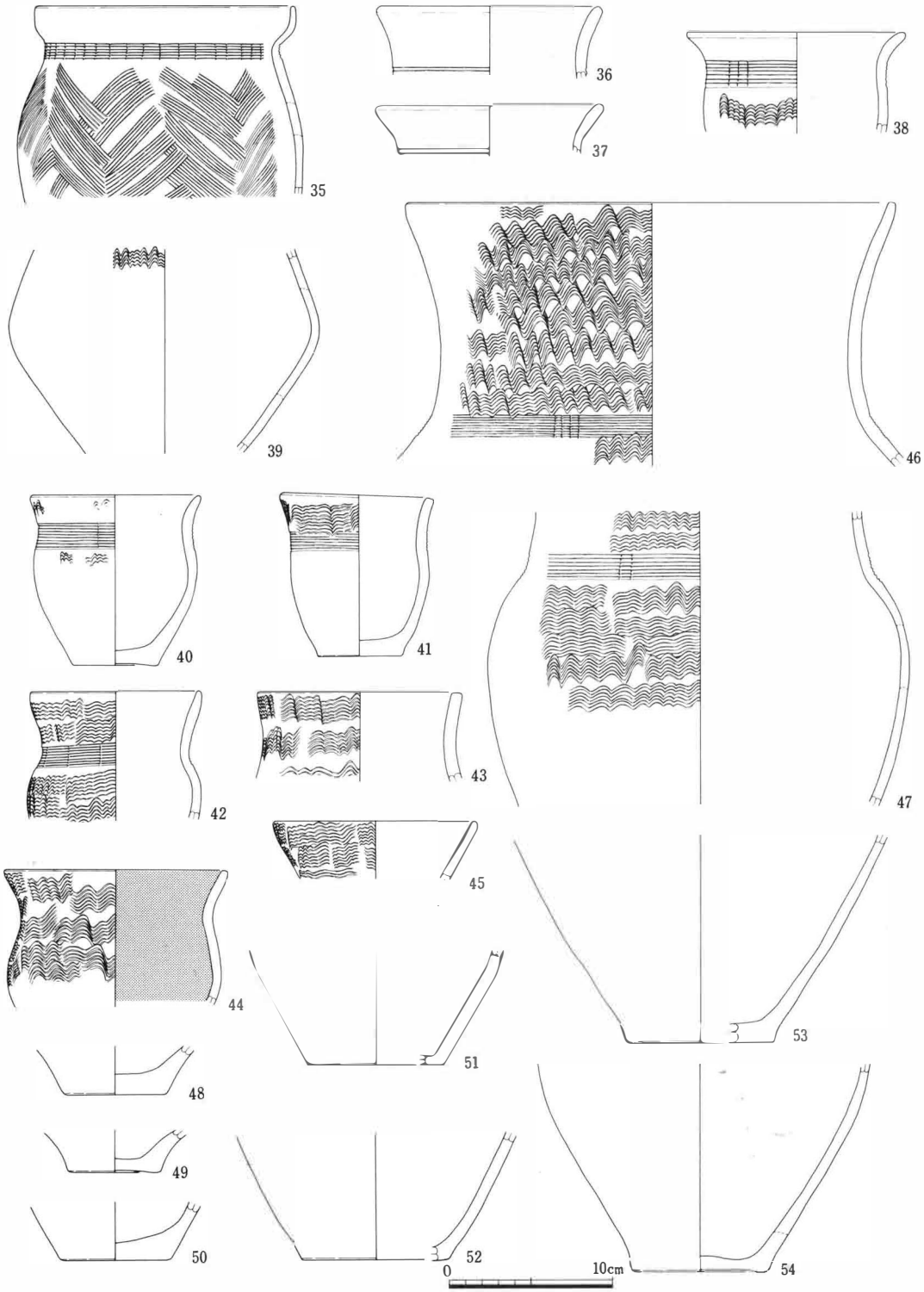


図59　遺構外出土土器実測図　②

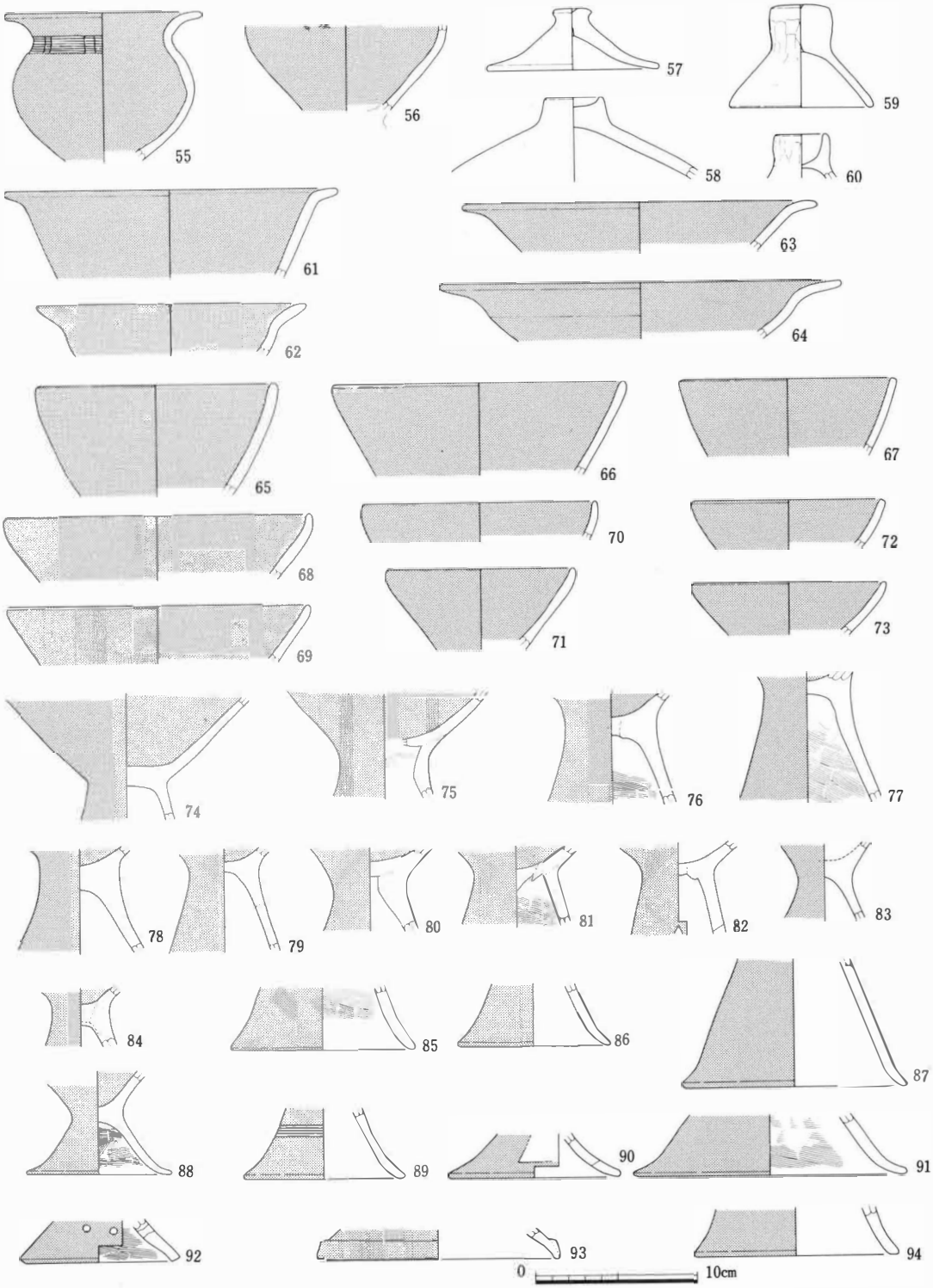


図60　遺構外出土土器実測図　③

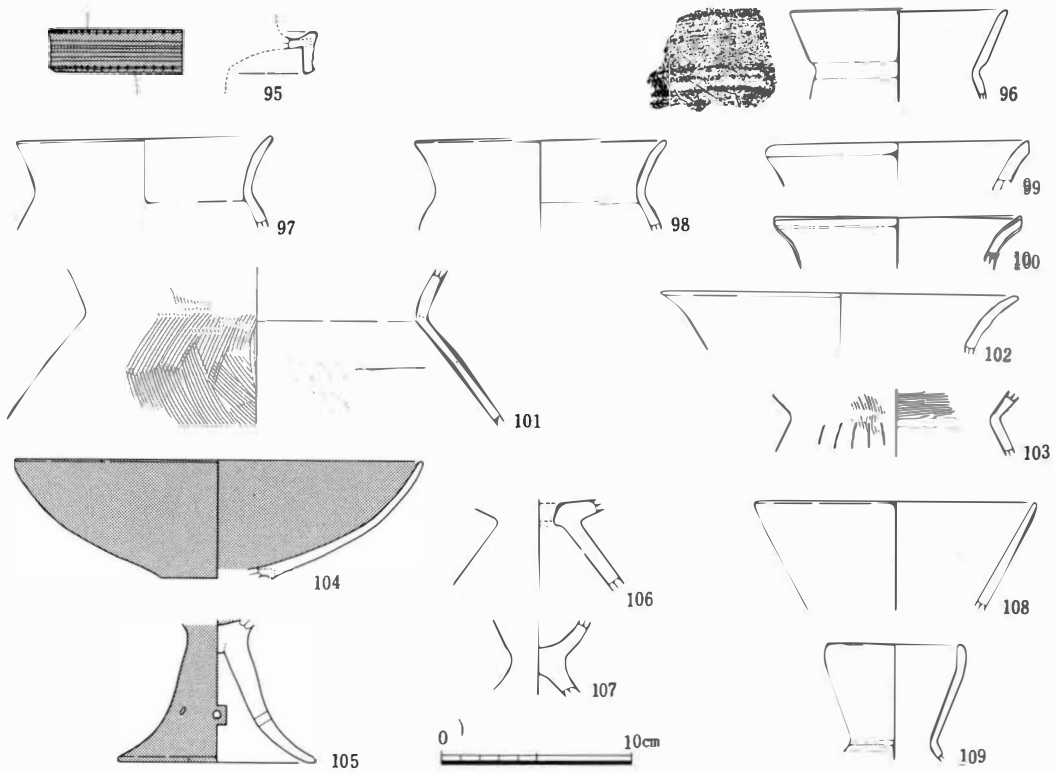


図61　遺構外出土土器実測図　④

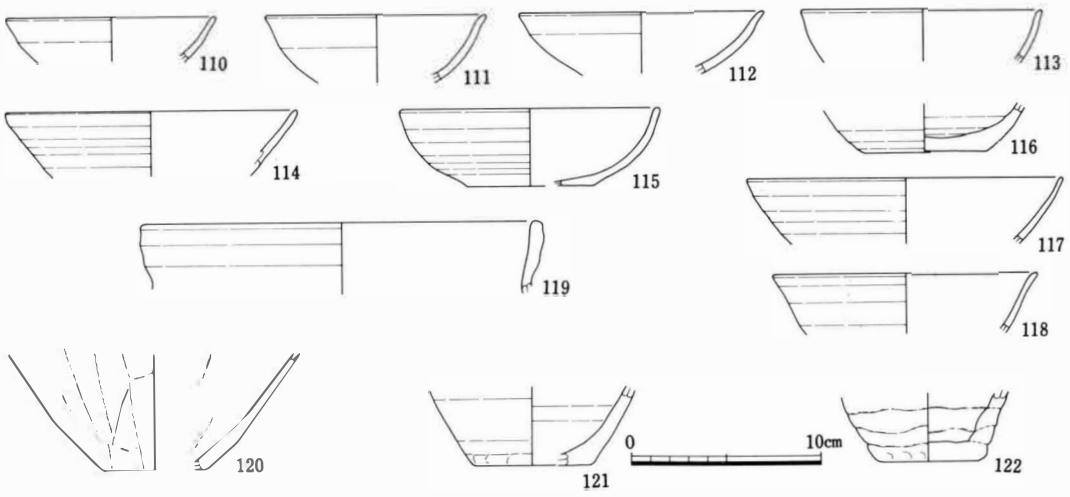


図62　遺構外出土土器実測図　⑤

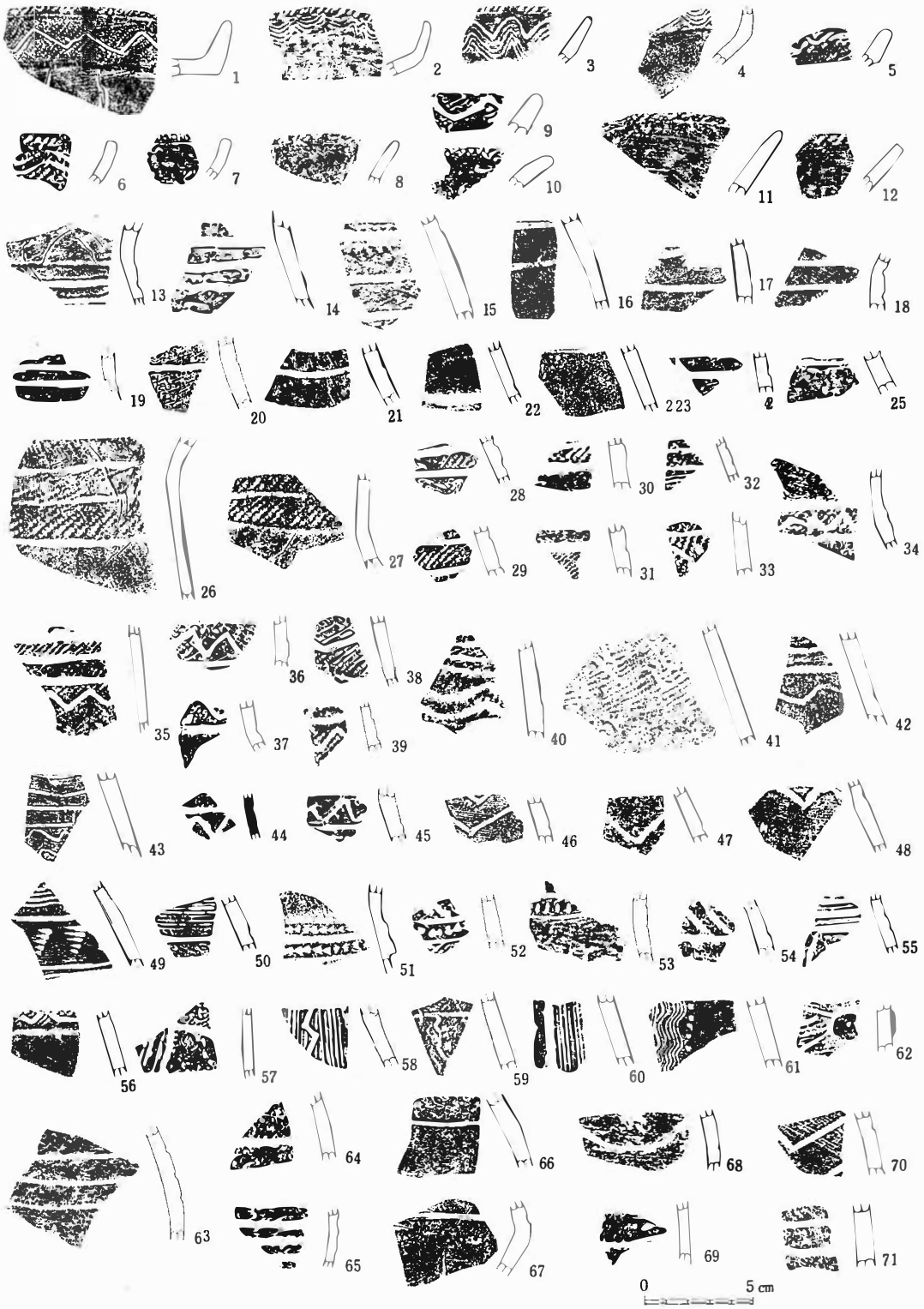


図63　遺構外出土土器拓影　①

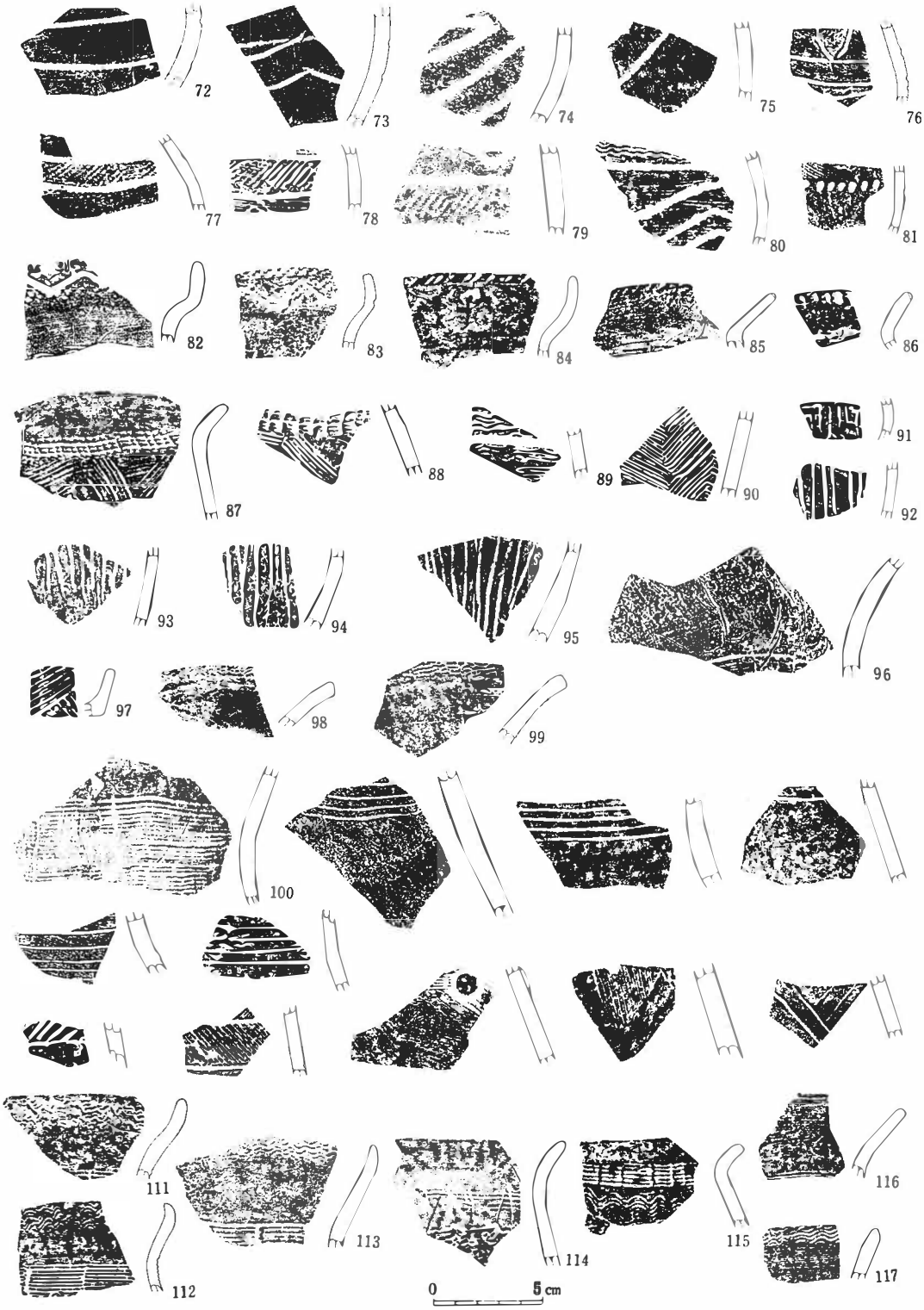


図64　遺構外出土土器拓影　②

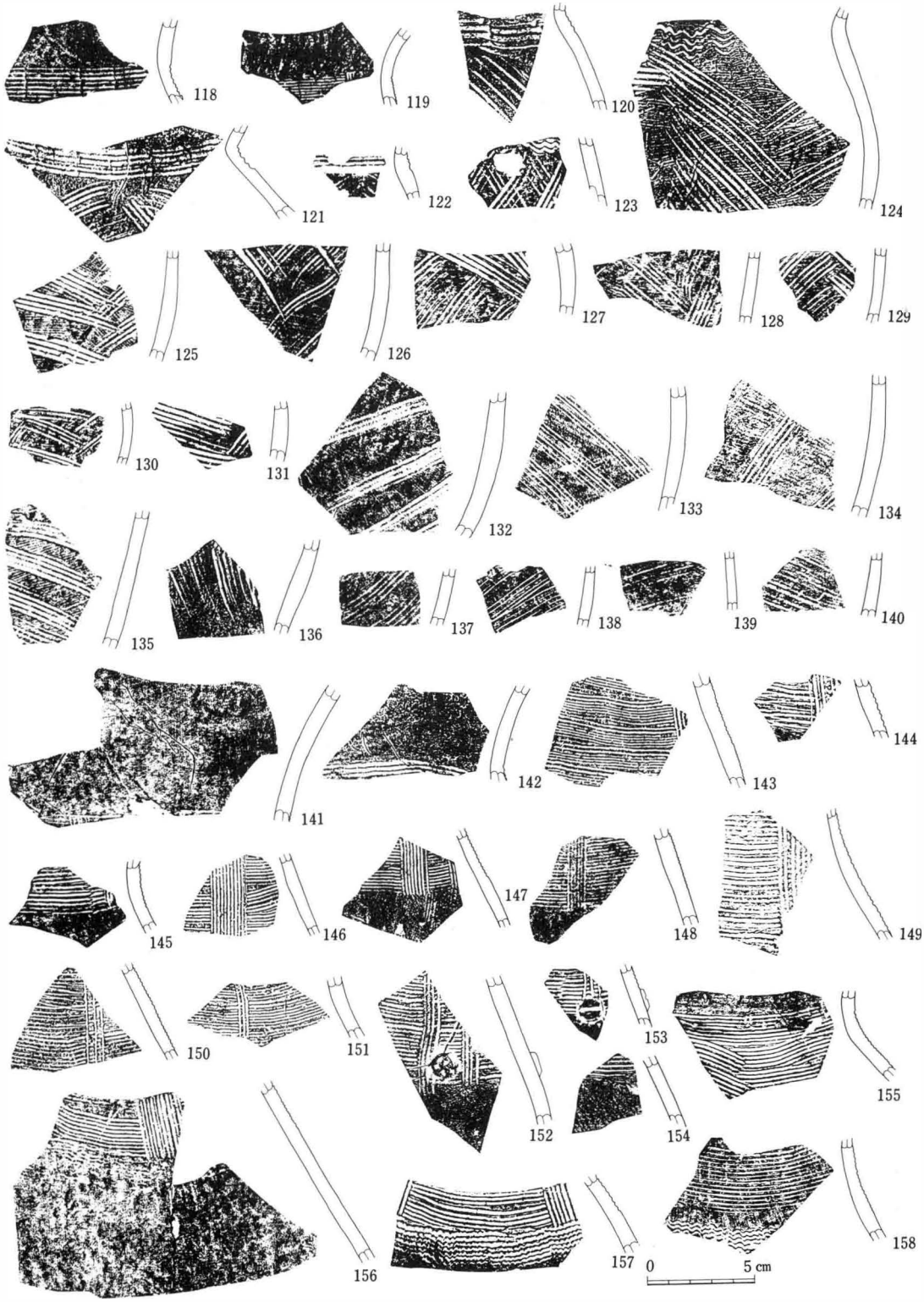


図65　遺構外出土土器拓影　③

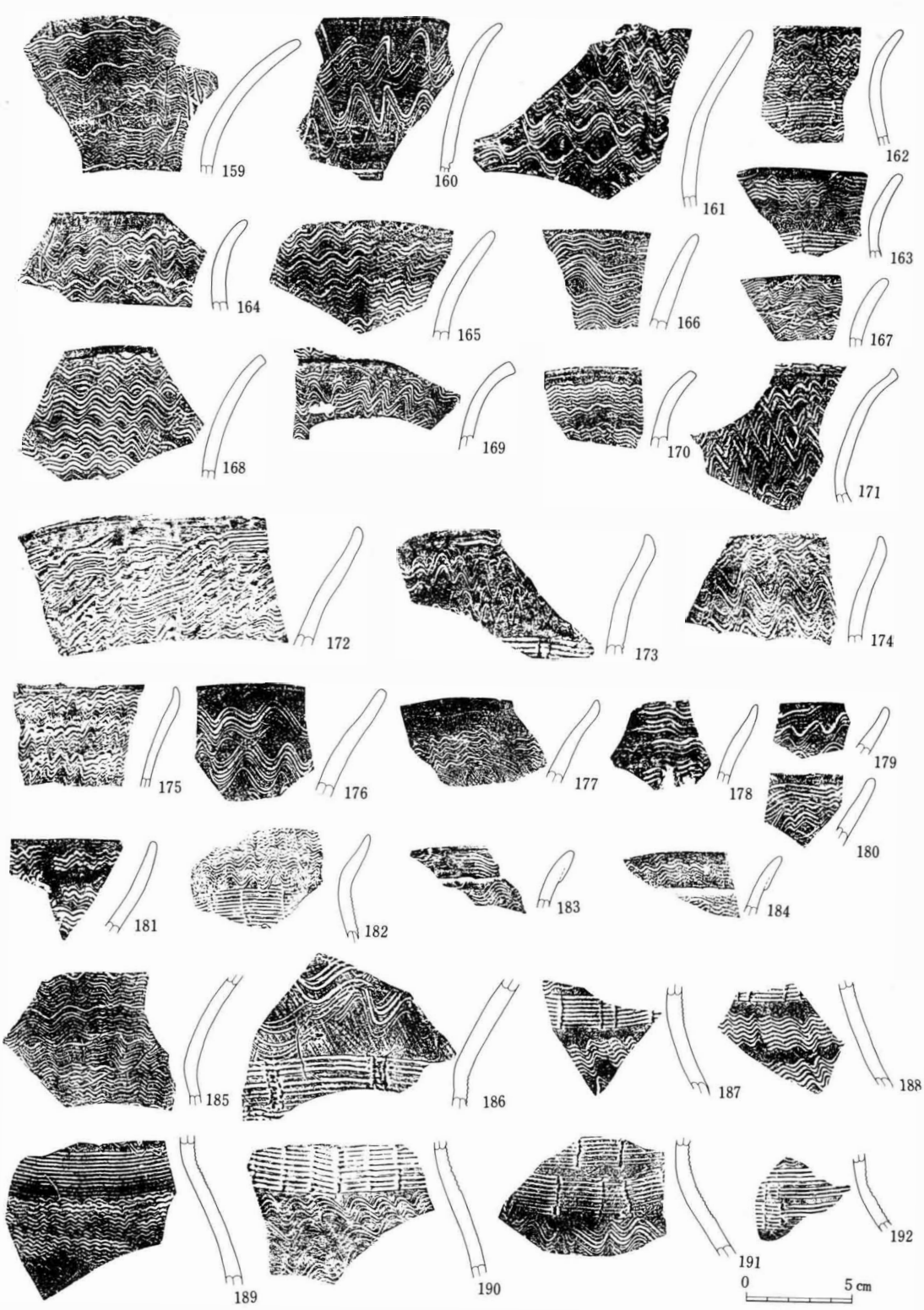


図66　遺構外出土土器拓影　④

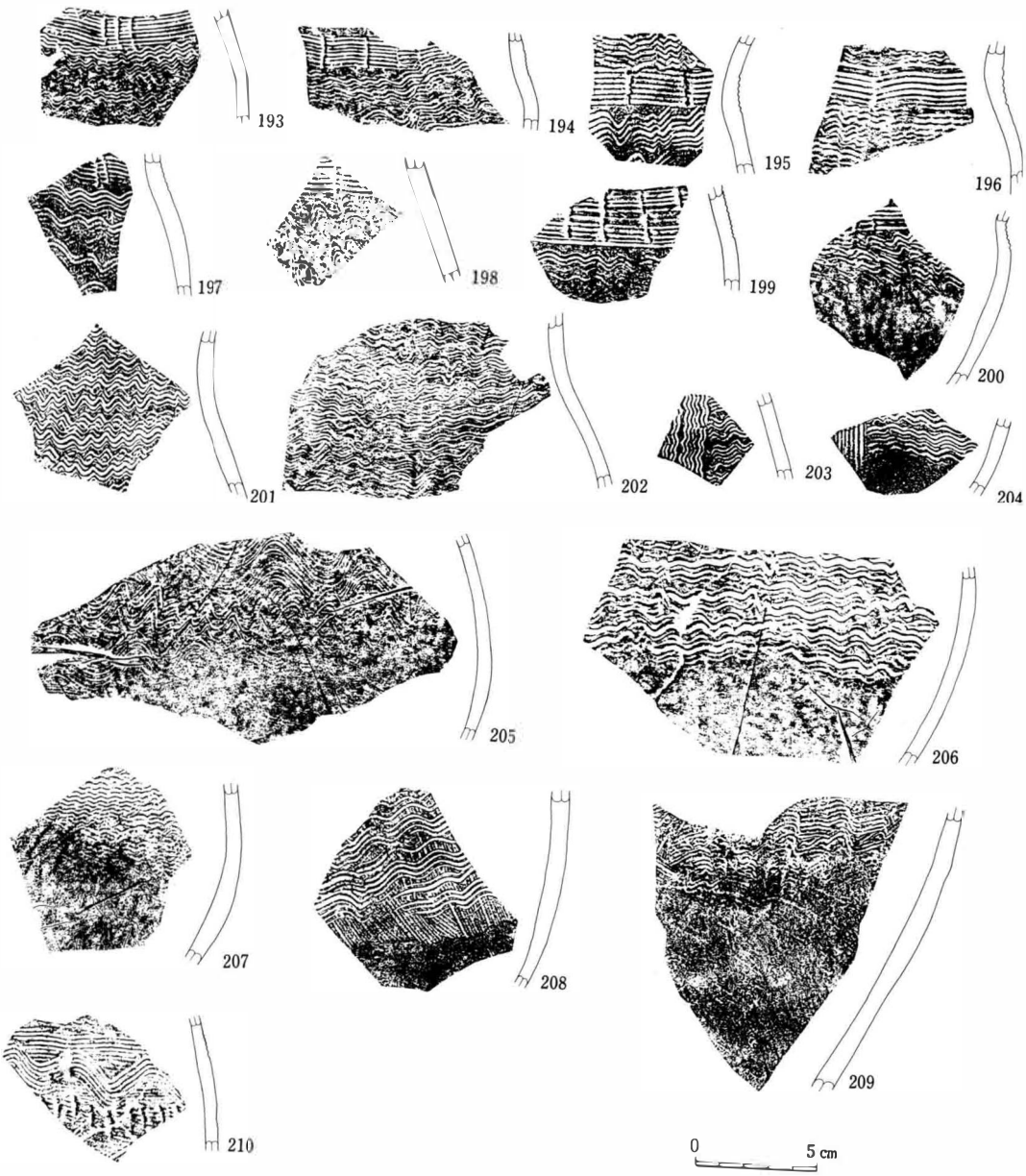


図67　遺構外出土土器拓影　⑤

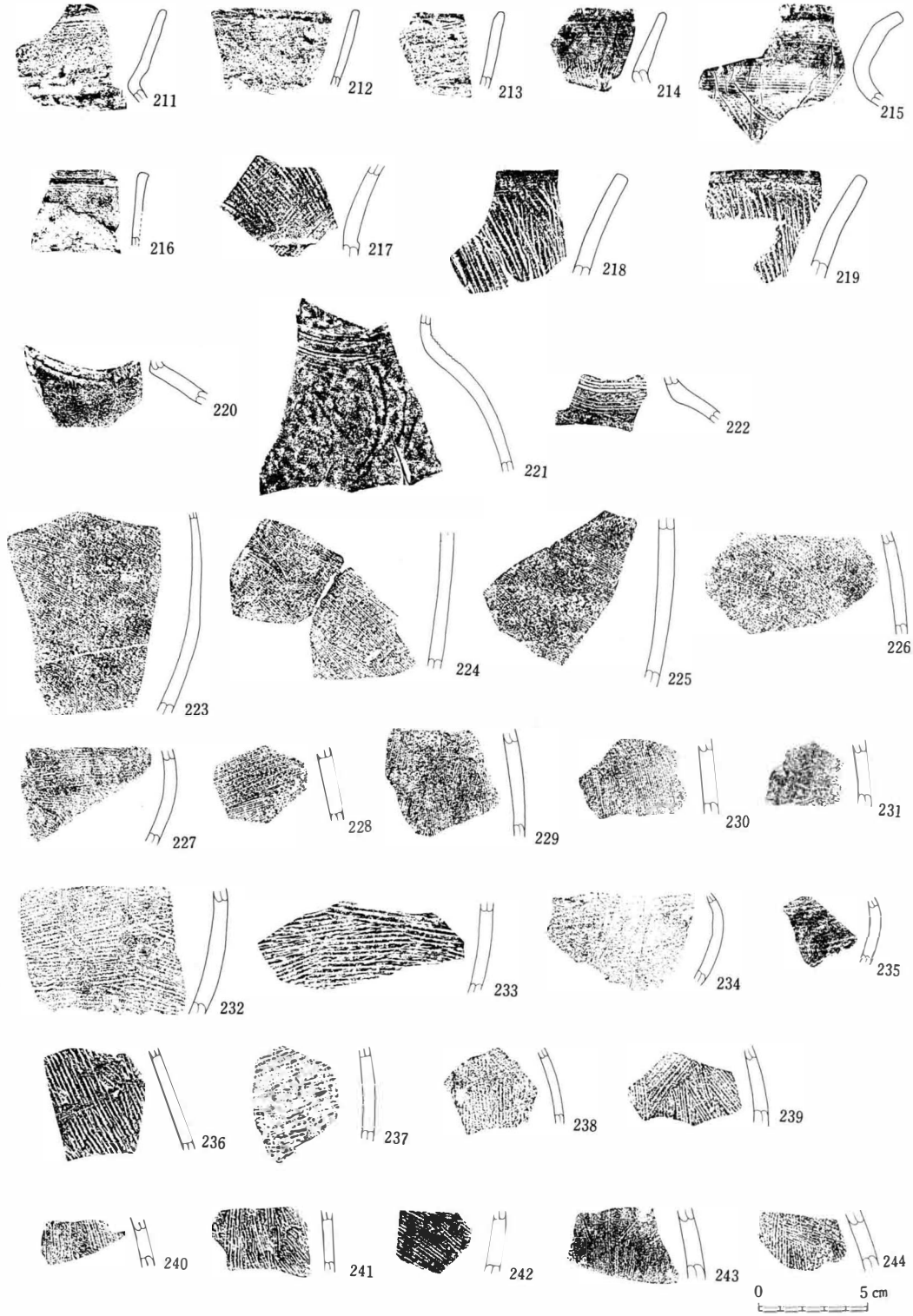


図68　遺構外出土土器拓影　⑥

石器

本遺跡より出土した石器類は、全て弥生時代に所属するものと思われる。以下、順次個々の遺物につき、観察を記載していくことにする。

1・2は、1号住居址床面より出土したもので、1は、ひん岩製の扁平片刃石斧である。表裏面並びに側面には自然面を残すが、刃部付近は平滑で擦痕が見える。刃部幅6.1cm、最大長11.7cm、厚さ1.65cm、重量229gを測り、刃部の角度は45°前後である。2は、砂岩製の扁平片刃石斧で、刃部を除き全面に自然面及び剥離面を残すものである。刃部幅3.3cm、最大長5.5cm、厚さ1.2cm、重量47gを測り、刃の角度はやはり45°前後である。

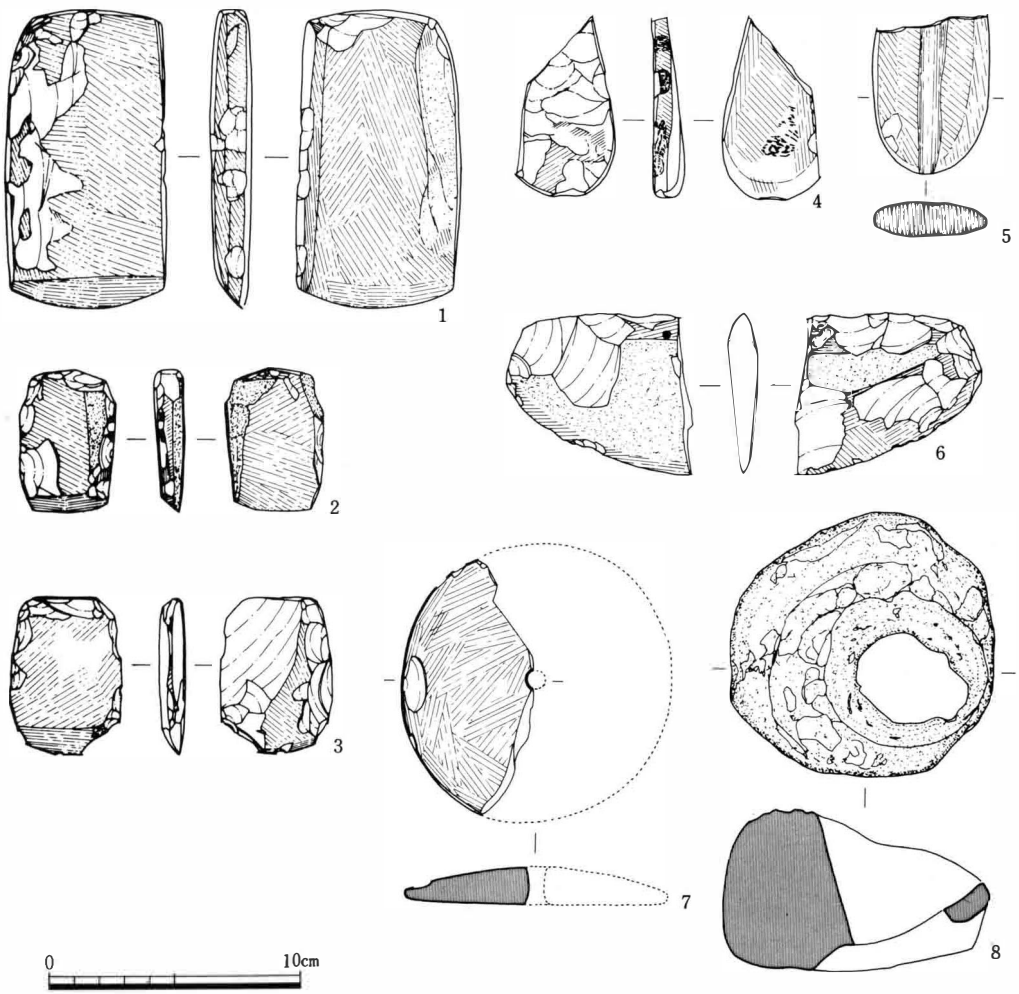


図69　石器類実測図

3は、検出面出土で、ひん岩製の扁平片刃石斧である。両面の縁にはば全周して敲打痕がめぐり剝離痕が見られ、一部磨耗している。重量は40ｇを測り、刃の角度は35°である。

4は、5号住居址より出土したもので、硬砂岩製の扁平の石斧形を呈する折損品である。表面は平滑な面であるが、先端と縁部に敲打痕が見られる。また、裏面全体は荒い剝離痕が見られる。側部に平滑な擦痕が看取される。残存部幅3.5cm、最大長７cm、厚さ1.3cm、重量45ｇを測る。

5は、5号住居址より出土した扁平な円味のある細長い砥石と思われる折損品である。両面とも平滑な研磨面を造り出し､特に表面中央に幅0.9cmのU字状の溝が縦位に磨耗されているのが見える。最大幅4.4cm、長さ5.8cm、厚さ1.4cm、重量62ｇを測る。砂岩製。

6は、半月形を呈する石包丁未製品と思われるものである。両面ともに中央辺りに自然面を残すが、側面には剝離痕が見られる。また刃部には僅かに摩耗して擦痕が残る。基部には一箇所両側より穿孔しようとした跡が見受けられる。残在幅6.8cm、最大長6.2cm、厚さ1.2cm、重量71ｇを測る。硬砂岩製。

7、検出面より出土した、紡錘車と思われる折損資料である。砂岩製で、表・裏面ともに平滑に整形され、僅かに縁部に剝離面が見られる。また、中央部は厚味を増し、側面は円味を呈している。半径は、約5.3cmのほぼ円形で、最大厚は1.5cm、重量は73ｇを測る。

8は、9号土壙より出土した軽石製の凹石である。扁平な円礫に、一辺に片寄った深い凹みを持ち、凹みは貫通する。また、全面に敲打痕がある。最大幅10.4cm、最大厚6.2cm、最小厚１cmである。

IV 総　括

本遺跡からは前述のごとく多数の遺構ならびに遺物が検出された。時期が明確に把握されたものでは、弥生時代中期・栗林式期－住居址1軒、弥生時代後期箱清水式期－住居址4軒・甕棺墓1基・土壙6基、弥生時代終末～古墳時代初頭－住居址2軒、平安時代－住居址1軒・溝址2条であり、その主体は弥生時代後期・箱清水式期にあるものと言えよう。また同時に遺構内外より、北陸系を中心とする外来系土器が出土していることも、本遺跡の特徴と言える。以下弥生時代ならびに外来系土器を中心に2・3気づいた点を述べ調査の総括としたい。

〔弥生時代〕　中期栗林式期の遺構としては1号住居址がある。出土土器は小破片のみで時期的詳細は不明であるが、床面からは大小2点の扁平片刃石斧が出土した。北信において確実に時期の把握し得る遺構出土の大陸系磨製石器類は、市道松節－小田井神社地点遺跡(長野市教委　1986)等にややまとまった出土例があるが未だ類例は乏しくその意義は大きい。また1号住居址の平面プランは隅丸（長）方形を呈する。北信においては、中期栗林式期の住居址プランの主流は円形であることを考慮するならば、後期への過渡期段階すなわち中期終末の所産とも考えられるが前述のごとく時期的詳細は不明であり、北信においても中期段階で方形系統の住居址が存在する可能性を指摘しておくにとどめる。

図67－210に示した土器は上から櫛描波状文→直線文→簾状文→単斜条痕という特異な文様構成をとり、施文はいずれも右回りになされる。このような文様構成は中部高地型櫛描文を有する土器の中には基本的には認められず、他地域からの影響特に北陸地方の小松式の影響が強いものかと考えられる。ただし文様帯下端には単斜条痕（羽状文？）が認められる点よりすれば、他地域の影響を受けつつも在地で製作されたものと理解できよう。近年新潟県柏崎市下谷地遺跡（新潟県教委　1977）出土資料はもとより、金沢市磯部運動公園遺跡（金沢市教委　1988）においても栗林系土器の出土が報告されており、当該期における北陸地方との交流の問題も、中部高地型櫛描文の生成発展の問題とからめて今後重要な課題となろう。

後期前半　吉田式期の明確な遺構は今回の調査では確認されていない。しかし5号土壙出土資料をはじめ図59－35～37等吉田式土器もかなり出土しており、本遺跡が所在する自然堤防上には当該期の集落も存在する可能性が高い。

後期後半・箱清水式期の遺構として確実なものには、3～5・8号住居址、甕棺墓、12・13号土壙等がある。甕棺墓を除きいずれも断片的な資料で詳細な考察はなし得ぬが、全体に大きな様相差は看取し得ず、高坏の形態等からすればいずれも青木編年の第5段階（青木和明　1984）に

相当するものと考えられる。ただし壺の頸部文様のうち、T字文の下に波状文が付加文として加わる文様構成をもつもの、また甕の頸部簾状文が施文されないものが多い点等は、地域的型式差を反映している可能性が強く今後の検討課題としたい。

〔外来系土器について〕　本遺跡からは遺構内外から、北陸系を中心とするいわゆる外来系土器が比較的多く出土しているが、そのうち遺構に伴って出土したものには3号住居址出土の長頸壺（図9－1）と、6号住居址出土の甕（図19－4）とがある。

3号住居址出土の長頸壺(1)は、胴部を欠損するが口縁部は有段口縁をなし、外面は篦磨き・赤彩され、内面はナデ整形後赤彩されている。胎土も黄灰白色の比較的精選されたもので、明らかに在地のものと異なる。管見ではあるが、長頸壺において有段口縁を呈するものは北陸地方の弥生後期～終末期に散見するものであり、石川県羽咋郡志賀町鹿首モリガフチ遺跡P4G調査区第3層出土土器（石川県埋文センター　1984）や、新潟県長岡市横山遺跡環濠出土土器（長岡市教委　1987）の中に類似した形態のものが認められ、その系譜を北陸地方に求めておきたい。

6号住居址出土の甕(4)は、口縁部が「く」の字状に外反し端部が横ナデによる面をもつもので、北陸東北部地方にその系譜が求められよう。新潟県内越遺跡（新潟県教委　1983）・高塩B遺跡（西山町教委　1983）・緒立八幡神社遺跡（黒崎町教委　1982）出土資料中等に類例があり、また県内では中野市安源寺遺跡（星　他　1983）出土資料中にも認められる。また同住居址出土の甕(5)は、口縁部が頸部から短く立ち上がった後に短く外反する特異な形態をとるもので、今のところ他に類例は見い出せない。形態的には箱清水式土器にその系譜を求め得ぬが、胴部内面のみていねいに篦磨きされ、甕内面の篦磨きの手法という点では箱清水式からの影響が考えられる。いずれにしても今後の類例の増加を待ちたい。

図61・68には遺構外出土の外来系土器ならびに古式土師器と思われるものを示した。図61－95は北陸系の装飾器台と考えられる。受部側面が下方へ垂下する形態で確実なものとしては県内で初例であろう。垂下部には篦状工具先端によって擬凹線文を3本施し、垂下部上下端ならびにその側面に篦刻みを施すものであり外面は赤彩される。石川県野々市町御経塚ツカダ遺跡82－3号住居址（野々市町教委　1984）や金沢市南新保D遺跡T－104溝（金沢市教委　1981）出土資料中に類例が認められる。月影式期の所産と考えられるが垂下部のみの小破片であり詳細は不明である。

図61－96、図68－211～213はいわゆる月影タイプの小型甕で、口縁端部が尖り気味に外反して終わる96と、端部が丸く終わる211～213の2つに分けられる。口縁部外面はいずれも強いヨコナデによって条線が残されるが、擬凹線は施されず内面の指頭圧痕も認められない。96の胴部外面には横方向の篦削りが認められるが、内面の篦削りの有無は不明である。以上のような特徴を考慮するならばこれらの資料は、加賀・越前北部といった北陸西部地域よりもやはり北陸東北部方

面との関連を想定した方がよいのかもしれない。

図61－99・100、図68－215などは、口縁部が「く」の字状に外反し端部が横ナデによる面をもつものであり、6号住出土の4と同様北陸東北部にその系譜が求められよう。図61－104・105は同一個体と考えられる。全体的に赤彩される点在地のものと考えられるが、形態は東海地方の元屋敷式もしくはさらに新しい段階のものに求められようか。図61－108は坩、109はいわゆる「ひさご壺」の口縁部と考えられる。108は東海もしくは畿内に、109は東海に系譜が求められるが、109は頸部に断面三角形状の突帯が貼りつけられる点特異であり、あるいは北陸地方との関連が考えられるかもしれない。

最後に長頸壺を出土した3号住居址の編年的位置について考察し、善光寺平における北陸系土器の出現期について若干触れておきたい。3号住居址出土資料中床面より一括の状態で出土したものは長頸壺(1)をはじめ壺(3)・高坏(6)・甕(8)の4点である。1を除いては½以下の破片資料であり断定的なことは述べ得ぬのが実情である。壺(3)は口縁部外面にハケ整形痕を顕著にとどめ、口縁部内面のみ篦磨きされる点、吉田式期の要素を強く残すが、甕(8)は非常に乱れた波状文が施され、また施文には明確な規則性が看取し得ぬ点、箱清水式でも新しい様相と理解できる。仮に廃棄の同時性との視点よりすれば、これらの土器群は後期箱清水式期の後半に位置づけられよう。住居址形態も住居址内炉の配置は主柱穴間中央に位置し、現状で認識されている吉田式期の住居址構造とは一線を画して理解できることもその傍証となろう。次に同様に住居址形態の面から、四ツ屋遺跡30号住居址(長野市教委　1980)、上山田町御屋敷遺跡Ｙ4号住居址(森嶋　稔　1978)等の従来箱清水式の終末期・外来系土器の出現段階と認識されていた資料（青木一男　1984）との比較を試みるならば、この時期の住居址形態は隅丸方形、不整方形など方形プランへと移行し、また住居址規模も縮小することが指摘されている(森嶋　1978)。この点よりすればやや大形の隅丸長方形プランを呈する3号住居址は、これら終末期段階よりも一段階古く位置づけることが可能かと思われる。仮にこの推定が正しいとするならば青木和明がすでに指摘したごとく（長野市教委　1984)、北信濃における箱清水式期の段階での北陸系土器群の流入の可能性はさらに高まるものとなり、ひいては箱清水式土器の他地域との併行関係にも再考を促す問題へと発展する可能性もある。ただし今回出土した箱清水式土器も断片的資料であり、あくまで明確な根拠のない推論の域をでない。今後の検討に期したい。

従来若穂地区における弥生時代の遺跡は、塚本・王子塚・十二山等の保科扇状地扇端部に立地する小規模な遺跡が確認されているのみであり（長野市若穂公民館　1981・1983）千曲川河岸の自然堤防上の調査は今回が初例である。今回の調査結果よりれば、この自然堤防上には、詳細は不明ながらも弥生時代～古墳時代、平安時代の集落遺跡が展開することは明らかである。特に今回の調査で得られた外来系土器群は、若穂地域のみならず、善光寺平全域における古墳出現期の

様相をさぐる上で貴重な資料となろう。今後の調査研究に期するところが大きい。最後に本報文執筆にあたっては長野県埋蔵文化財センター　笹沢浩氏・青木一男氏、長野県史刊行会　宮下健司氏より種々有益な御教授をいただいた。末筆ではあるが記して感謝申し上げます。

引用・参考文献

青木和明　1984　「箱清水式土器の編年予察」『長野県考古学会誌』48

青木一男　1984　「善光寺平南域における古墳出現期集落土器について」　第5回三県シポジウム　『古墳出現期の地域性』

石川県立埋蔵文化財センター　1983　『鹿嶋町徳前C遺跡調査報告（IV）』

〃　1984　『鹿首モリガフチ遺跡』

金沢市教育委員会　1981　『金沢市南新保D遺跡』

〃　1988　『金沢市磯部運動公園遺跡』

黒崎町教育委員会　1982　『緒立八幡神社遺跡』

長岡市教育委員会　1987　『横山遺跡』

長野市教育委員会　1980　『四ツ屋遺跡　徳間遺跡　塩崎遺跡群』

〃　1984　『箱清水遺跡(2)』

〃　1986　『塩崎遺跡群IV－市道松節－小田井神社地点遺跡』

〃　1987　『長野吉田高校グランド遺跡』

長野市若穂公民館　1981　『長野市若穂文化財地図』

〃　1983　『若穂の文化財』

新潟県教育委員会　1979　『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　下谷地遺跡』

〃　1983　『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書　内越遺跡』

西山町教育委員会　1983　『新潟県刈羽郡西山町高塩B遺跡発掘調査報告書』

野々市町教育委員会　1984　『御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）発掘調査報告書Ⅰ』

星　龍象　他　1983　「信濃の弥生式土器から土師式土器への変遷過程(2)」『信濃』35巻7号

宮本哲郎　1986　「装飾器台等の展開―これまでの検討から―」『シンポジウム「月影式」土器について』

森嶋　稔　1978　『更級埴科地方誌』第2巻原始古代中世編

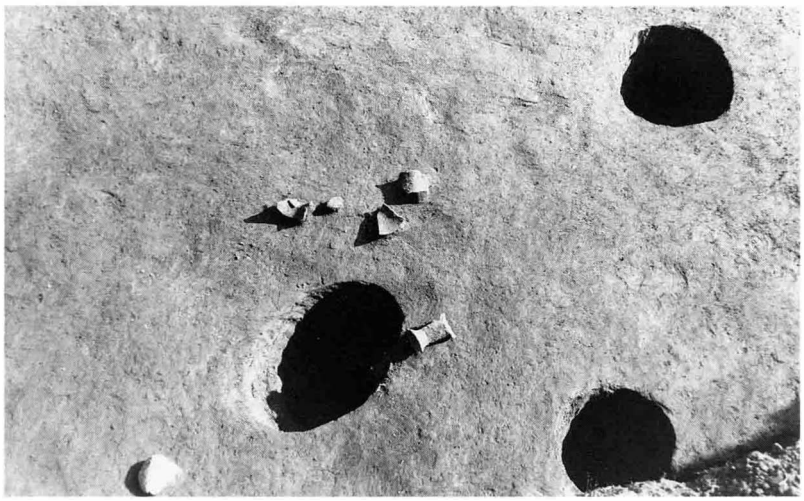
1号住居址

1号住居址遺物出土状況

2号住居址

図版 2

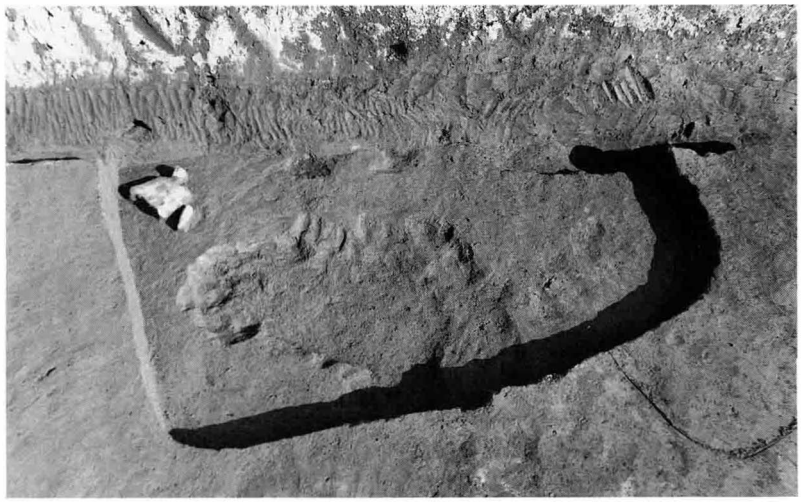
3 号住居址



3 号住居址遺物出土状況

5 号住居址

5 号住居址遺物出土状況



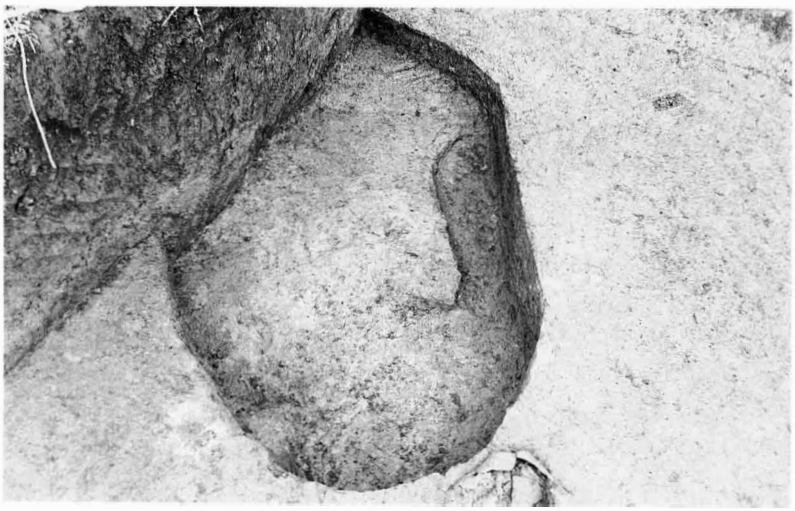
6 号住居址

7 号住居址

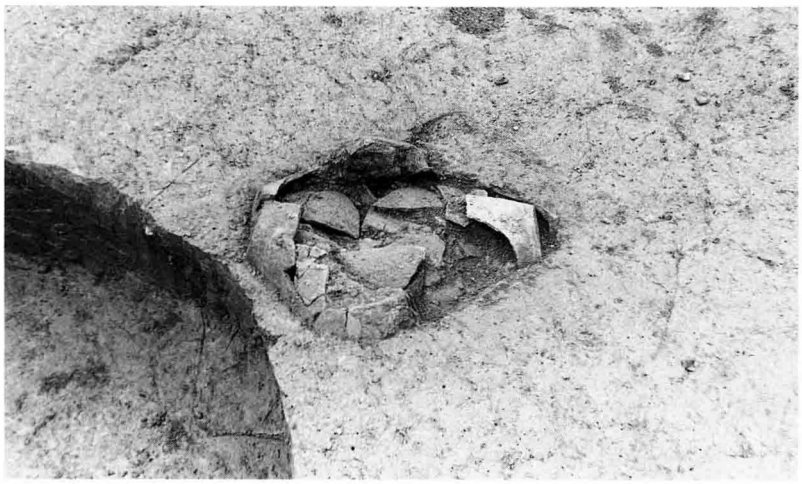
図版 4

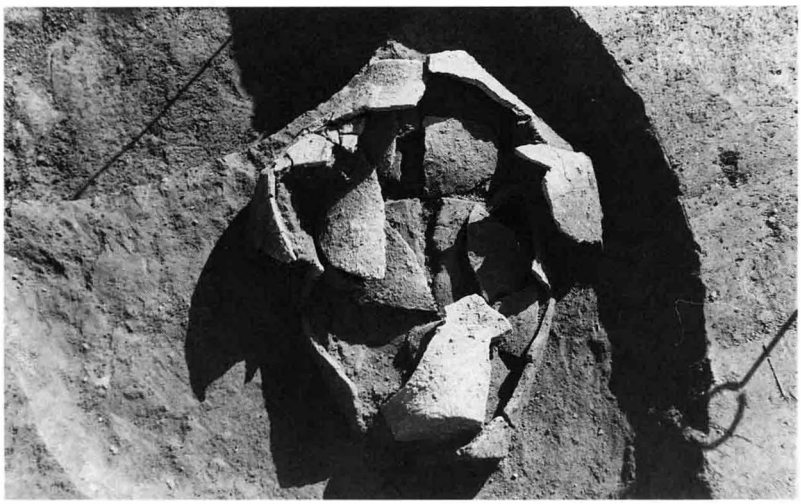
8 号住居址

9 号住居址



1 号土壙

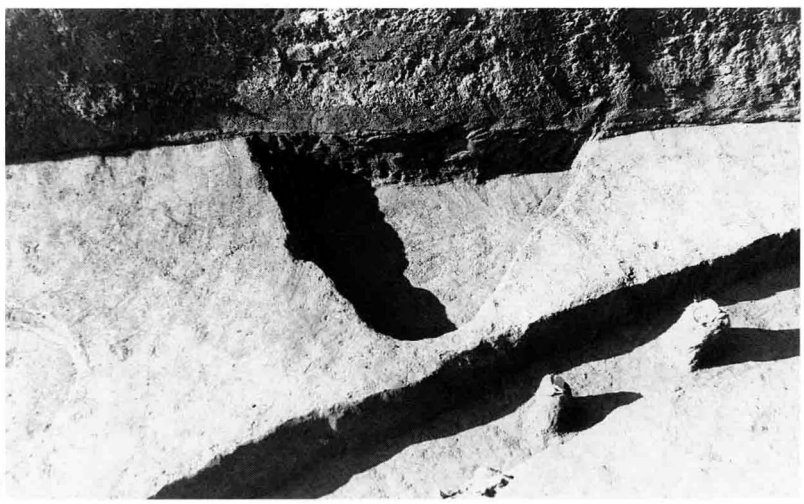




2号土壙（甕棺墓）

図版6

3号土壙

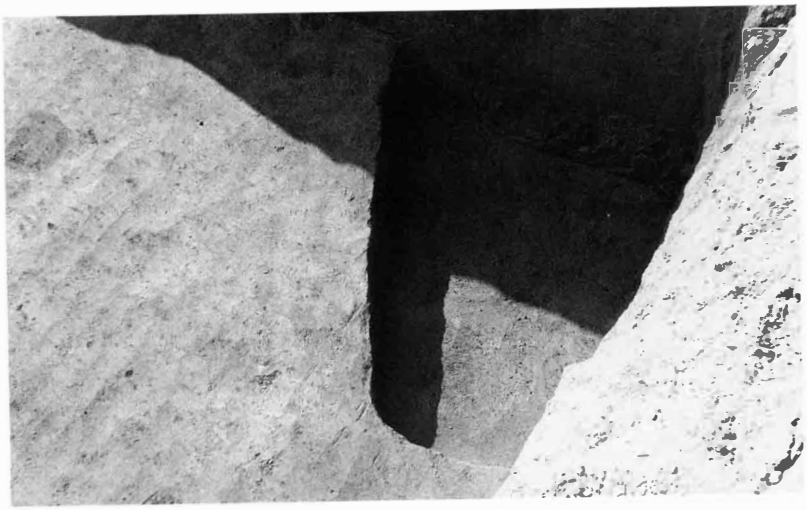


4号土壙

6号土壙

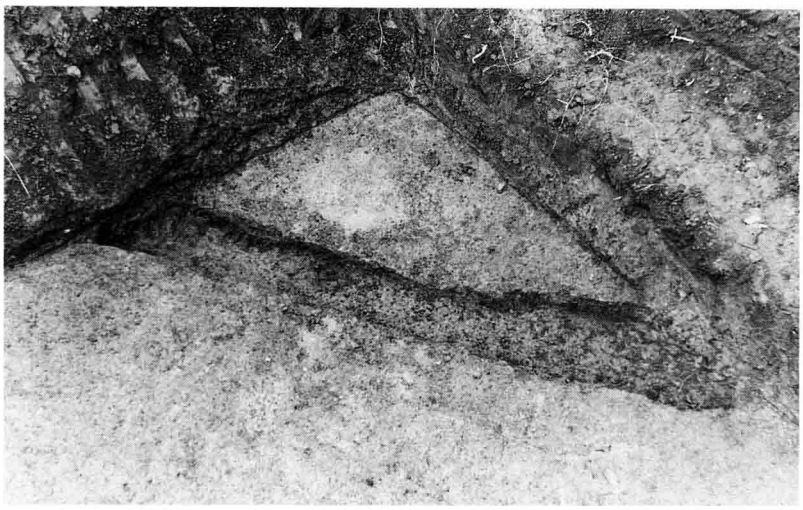
12号土壙

13号土壙

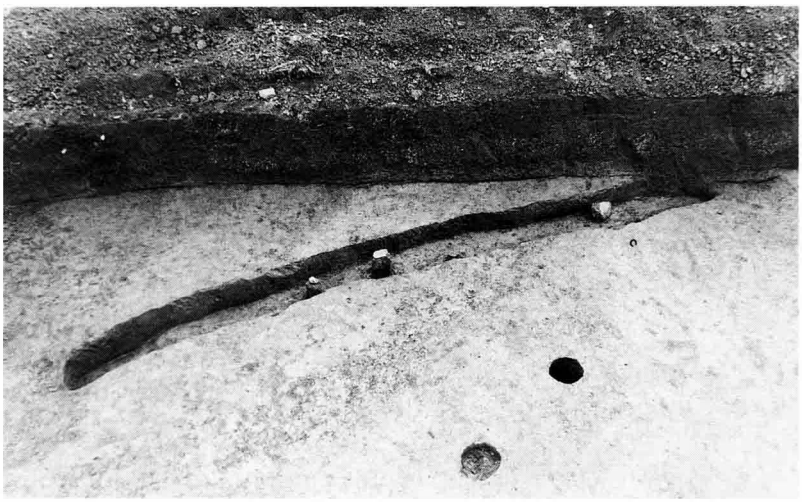


14号土壙

図版 8

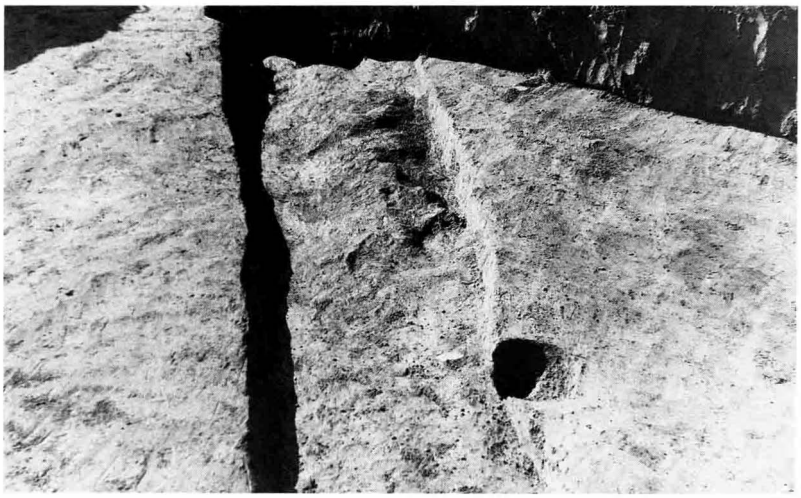


1 号溝址



3 号溝址

3 号溝址遺物出土状況



5 号溝址

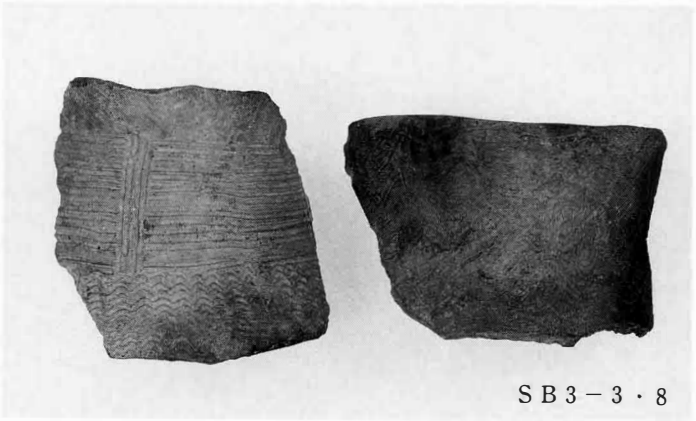
調査風景

図版10

SK2－2

SB5－3

SB3－1



SB3－3・8

SB6－4

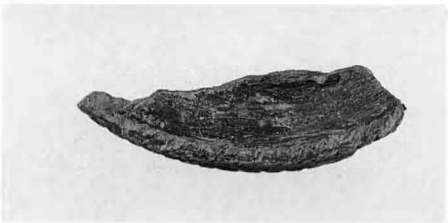
SB6－5

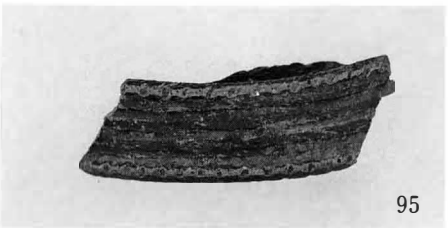
SK5－1

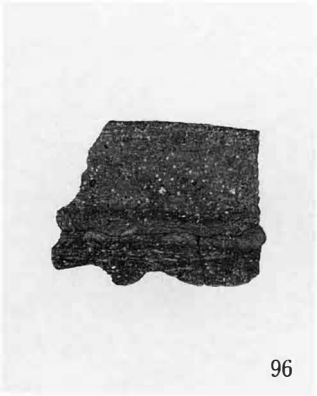
SK5－2

44・42

35

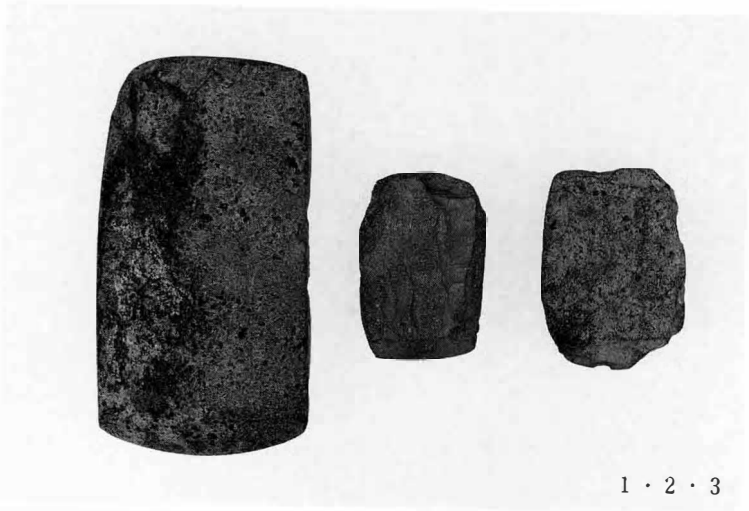



95

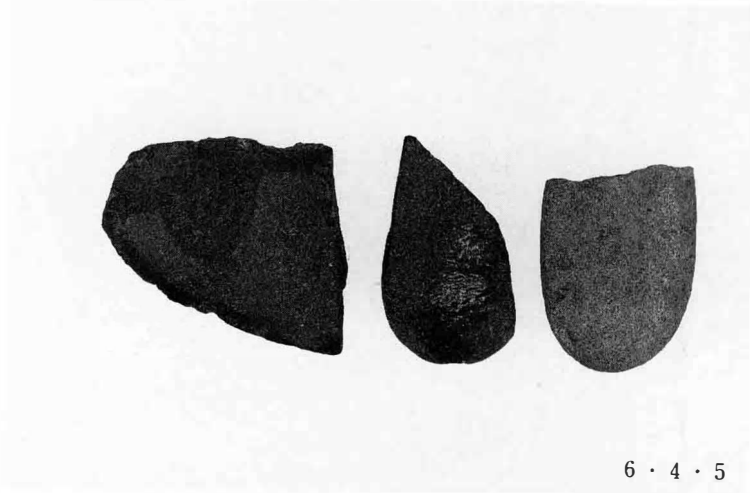

96

109

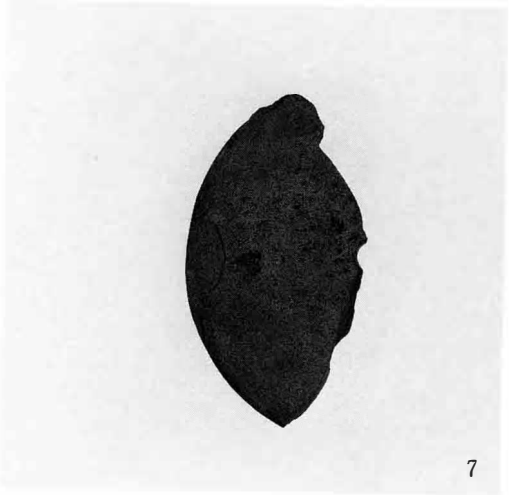
図版12



1・2・3



6・4・5



7

8

長野市の埋蔵文化財　第１集『信濃長原古墳群』
〃　第２集『浅川西条』
〃　第３集『中村遺跡』
〃　第４集『塩崎遺跡群』
〃　第５集『塩崎遺跡群(2)』
〃　第６集『三輪遺跡―付水内坐一元神社遺跡』
〃　第７集『田中沖遺跡』
〃　第８集『篠ノ井遺跡群』
〃　第９集『四ツ屋遺跡（第１～３次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』
〃　第10集『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
〃　第11集『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
〃　第12集『浅川扇状地遺跡群―牟礼バイパスＡ・Ｅ地点遺跡―』
〃　第13集『浅川扇状地遺跡群迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』
〃　第14集『石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡』
〃　第15集『箱清水遺跡(2)』
〃　第16集『石川条里的遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』
〃　第17集『浅川扇状地遺跡群―牟礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点遺跡―』
〃　第18集『塩崎遺跡群Ⅳ―市道松節―小田井神社地点遺跡―』
〃　第19集『土口将軍塚古墳―重要遺跡確認緊急調査―』
〃　第20集『三輪遺跡(2)』
〃　第21集『芹田小学校遺跡』
〃　第22集『吉田高校グランド遺跡』
〃　第23集『横田遺跡群　富士宮遺跡』
〃　第24集『塩崎遺跡群Ⅴ　殿屋敷遺跡』
〃　第25集『小島・柳原遺跡群　南川向遺跡』
〃　第26集『東番場遺跡』
〃　第27集『小柴見城跡』
〃　第28集『宮崎遺跡』
〃　第29集『浅川扇状地遺跡群　浅川端遺跡』
〃　第30集『地附山古墳群』

長野市の埋蔵文化財　第31集

町川田（まちかわだ）遺跡

印刷　昭和63年３月20日
発行　昭和63年３月31日
編集・発行　長野市教育委員会
長野市遺跡調査会
印刷　信毎書籍印刷株式会社